

青ノ山8号・9号墳発掘調査概報

—香川県丸亀市青ノ山山頂所在の
後期、終末期古墳—

1984年 3月

丸亀市教育委員会

は　じ　め　に

丸亀市内で最大の吉岡神社前方後円墳の北方に尾根続きの青ノ山古墳群は、古代の豪族の首長を葬った広大な地域にわたる古墳群で、丸亀市と綾歌郡宇多津町にまたがっている。その第1号墳から6号墳までは早くから調査がすすみ、昭和54年に土地開発事業中、7号墳（通称龍塚）の破損箇所から掘り出した花崗土の中から窓壁片数点と須恵器片多数が発見され、それが須恵器の登り窓跡と確認された。

それに続いて昭和55年、県教育委員会のご助力を得て第7号墳の発掘調査が、同年9月に完了し、調査報告書に出土遺物も含めて詳細に報告された。

次に、去る昭和57年5月から県教育委員会のご協力を得て第8号墳、第9号墳の発掘調査がすすめられ、今年1月から3月にかけてその整備が完了した。いまその調査記録が詳細に報告されることは喜びにたえない。県・市教育委員会各位のご努力に対し、厚く厚く謝意を表して、調査報告書の序とする次第である。

昭和59年3月

青ノ山山頂古墳群発掘調査團

団長 吉 岡 和 喜 治

< 例　　言 >

1. 本書は丸亀市教育委員会が香川県教育委員会の指導で、昭和57年5月～7月に発掘調査を実施した青ノ山8号、9号墳発掘調査概要である。
2. 発掘調査は香川県教育委員会文化行政課 東原輝明が担当し、同渡部明夫の応援を得た。事務は丸亀市教育委員会社会教育課が担当した。
3. 本書は東原が執筆・編集した。
4. 発掘調査には、調査作業員として長栄清一・山田　馨・下村嘉三郎・宮本忠芳・中野茂樹・林　正之・宇野義太郎・内藤キクエ・岡山幸八郎・渋谷武義の諸氏にお世話をになった。
藤田憲司氏（倉敷考古館学芸員）、川畑　迪氏（坂出市郷土資料館長）、松本敏三氏、斎藤賢一氏には適切な御指導をいただいた。また香川県教育委員会文化行政課埋蔵文化担当諸氏、町川義晃氏の御助言・御協力を得た。記して謝意を表します。

<本文 目 次>

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第2章 青ノ山8号、9号墳の位置と周辺の遺跡	2
第3章 青ノ山8号墳	5
1. 墳丘	6
2. 埋葬主体	10
3. 遺物出土状況	14
4. 出土遺物	15
第4章 青ノ山9号墳	22
第5章 青ノ山に所在する古墳について	24
第6章 まとめ	37

<図版 目 次>

図版 1. 青ノ山遠景(海より)	41
図版 2. 青ノ山遠景(南東より)	41
図版 3. 青ノ山8号墳墳丘(調査前)	42
図版 4. 青ノ山8号墳墳頂(調査前)	42
図版 5. 青ノ山8号墳石室上面検出状況(北より)	43
図版 6. 青ノ山8号墳石室上面検出状況(東より)	43
図版 7. 青ノ山8号墳石室全景(北より)	44
図版 8. 青ノ山8号墳玄室(西より)	44
図版 9. 青ノ山8号墳玄室(東より)	45
図版 10. 青ノ山8号墳玄室(南より)	45
図版 11. 青ノ山8号墳仕切石周辺状況	46
図版 12. 青ノ山8号墳羨道(玄室より)	46
図版 13. 青ノ山8号墳羨道(羨道中央より玄室をのぞむ)	47
図版 14. 青ノ山8号墳玄室東壁	47
図版 15. 青ノ山8号墳玄室北壁	48
図版 16. 青ノ山8号墳玄室南東隅	48
図版 17. 青ノ山8号墳東トレンチ北壁	49
図版 18. 青ノ山8号墳全景(周溝の一部、検出状況)	49
図版 19. 青ノ山9号墳伐開前(東より)	50

図版 20.	青ノ山 9 号墳伐開後（北より）	50
図版 21.	青ノ山 9 号墳石室（東より）	51
図版 22.	青ノ山 9 号墳石室（南より）	51
図版 23.	青ノ山 9 号墳石室（北より）	51
図版 24.	青ノ山 8 号墳出土遺物（杯，壺の蓋，器台？）	52
図版 25.	青ノ山 8 号墳出土遺物（壺，提瓶，甌）	53
図版 26.	青ノ山 8 号墳出土遺物（壺，鉄鎌，装身具，弥生土器）	54

<挿図 目 次>

第1図	青ノ山 8 号， 9 号墳と周辺の遺跡	2
第2図	青ノ山 8 号墳地形測量図	5
第3図	青ノ山 8 号墳石室断面図及び南北トレンチ土層序実測図	7～8
第4図	青ノ山 9 号墳縦断面実測図	7～8
第5図	青ノ山 9 号墳横断面実測図	7～8
第6図	青ノ山 8 号墳埴丘出土遺物実測図	9
第7図	青ノ山山頂からの展望	9
第8図	青ノ山 8 号墳石室上面実測図	10
第9図	青ノ山 8 号墳石室実測図	11～12
第10図	青ノ山 8 号墳石室	13
第11図	青ノ山 8 号墳遺物出土状況図	14
第12図	青ノ山 8 号墳出土須恵器実測図（M1）	15
第13図	青ノ山 8 号墳出土須恵器実測図（M2）	16
第14図	青ノ山 8 号墳出土装身具実測図	18
第15図	青ノ山 8 号墳出土鉄製品実測図	19
第16図	青ノ山 8 号墳鉄製品出土状況	19
第17図	青ノ山 9 号墳地形測量図	22
第18図	青ノ山 9 号墳石室上面実測図	23
第19図	青ノ山 9 号墳石室実測図	23
第20図	青ノ山所在の古墳	24
第21図	青ノ山 7 号墳石室実測図	27
第22図	青ノ山 6 号墳石室実測図	27
第23図	青ノ山 6 号墳	27
第24図	青ノ山 3 号墳	27

第25図	青ノ山4号墳	28
第26図	青ノ山5号墳	28
第27図	青ノ山5号墳西方の古墳	28
第28図	青ノ山西麓中腹に所在する古墳	28
第29図	青ノ山西麓中腹の古墳(林道上)	28
第30図	青ノ山西麓中腹の古墳(林道下)	28
第31図	青ノ山1号墳	29
第32図	青ノ山宇多津4号墳	29
第33図	青ノ山宇多津4号墳東方の古墳	29
第34図	青ノ山宇多津5号墳石室実測図	29
第35図	青ノ山2号墳	29
第36図	淨願寺山古墳群	30
第37図	母神山古墳群	30
第38図	石室平面プラン模式図一覧	35~36

<表 目次>

第1表	青ノ山8号、9号墳周辺の遺跡一覧表	3
第2表	装身具計測一覧表	18
第3表	青ノ山8号墳出土須恵器觀察表(表1)	20
第4表	青ノ山8号墳出土須恵器觀察表(表2)	21
第5表	青ノ山古墳群一覧表	25~26
第6表	古墳時代後期~終末期における古墳一覧表(表1)	31~32
第7表	古墳時代後期~終末期における古墳一覧表(表2)	33~34



第1章 調査に至る経緯と調査の経過

青ノ山山頂付近には古墳時代後期の古墳が数基、存在することが漠然と知られていたが、この程青ノ山1号墳の南西に1基、それより南の斜面上に1基、存在することが確認された。

青ノ山山頂は昭和56年度から環境保全事業を進めており、昭和57年7月からは、これらの古墳のすぐ下を通って山頂に至る遊歩道建設にかかるためこの用地をも含めて広範囲に確認調査を実施することとした。

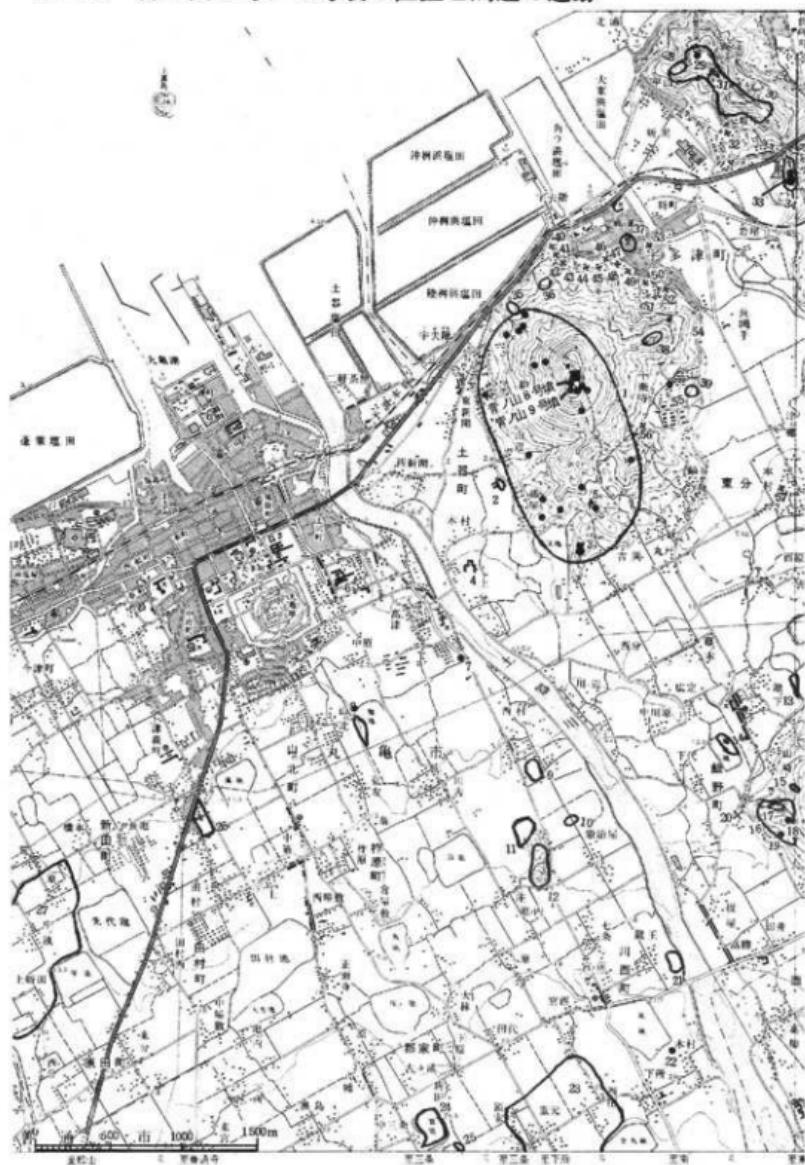
確認調査の結果、前述の2基以外に古墳は検出されなかった。そこで2基の位置について県教委文化行政課に相談したところ、調査後の整備保存を前提に、発掘調査を実施したらどうかという指導をいただいた。

従って発掘調査は、石室調査に重点を置き、それ以外の調査については最少限にとどめた。発掘調査は、県教委の東原輝明技師の指導のもと、昭和57年5月10日から7月30日まで実施した。

発掘調査の経過（調査日誌より抜粋）

5月10日	発掘調査初日。現状写真撮影。発掘道具搬入。	レンチ発掘。堀家市長、井沢教育長、市広報課職員来訪。
5月12日	伐開作業。9号墳、地形測量。	6月23日 8号墳、表土剥離下げ。仕切り石に接し短頸壺出土。玄室精査。耳環、鉄鎌出土。玄室内埋土の水洗いでガラス玉5個検出。
5月17日	9号墳、石室、E, W, N, Sトレング先発掘。	6月29日 8号墳、前底部ほぼ完掘。川畠迪氏（坂出市郷土資料館長）来訪。
6月1日	8号墳、填丘表土剥ぎ。	7月2日 8号墳、Eトレング先発掘。9号墳トレング土層序線引き。9号墳トレング埋め戻し。
6月7日	9号墳、石室実測。8月墳、Sトレング先発掘。	7月6日 8号墳、石室などの写真撮影。
6月10日	8号墳、石室掘り下げ。S, Eトレング掘り下げ。城乾婦入学級26名来訪（直井武久氏引率）。	7月9日 8号墳、石室実測開始。市教育民生委員会委員7名視察。
6月15日	8号墳、石室掘り下げ。玄室より須恵器（杯、燈籠壺、提瓶、台付長頸壺）出土。	7月20日 8号墳、玄室4壁実測終了。
6月16日	8号墳、石室掘り下げ。床面確認。杯、管玉出土。新聞記者、NHK取材。	7月22日 8号墳、玄室床面実測。表土剥離。
6月17日	8号墳、石室掘り下げ。杯、直口壺、短頸壺出土。藤田憲司氏（倉敷考古館学芸員）来訪。	7月28日 8号墳、表土剥離実測終了。8号墳石室上面実測終了。
6月18日	8号墳、表土剥離。NW, SW, Sトレ	7月30日 8号墳各トレング上層実測。現場での調査終了。

第2章 青ノ山8号、9号墳の位置と周辺の遺跡



第1図 青ノ山8号、9号墳と周辺の遺跡

第1表 青ノ山8号・9号墳周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	遺跡の概要
1	青ノ山古墳群	古墳	丸亀市瀬野町、宇多津町青ノ山	古墳時代後期～終末期の古墳群
2		散布地	丸亀市土器町	土師器散布地
3	吉岡神社古墳	古墳	丸亀市瀬野町	古墳時代前半。全長50mの前方後円墳。銅鏡、筒形銅器出土。
4	青ノ山城跡	城跡	丸亀市土器町上分	生駒家の家臣、尾池文落の居城
5	青ノ山1号窯跡	窯跡	丸亀市瀬野町	全地下式無段窯。6世紀末～7世紀前半操業。須志窯系
6	土居高木塚古墳	古墳	丸亀市城東町	古墳時代後期。円墳（径8m）。刀劍出土。消滅。
7		古墳	丸亀市土器町高津	消滅。埴輪、高杯など出土。
8		散布地	丸亀市山北町中原塩池	須恵器散布地
9		散布地	丸亀市土器町	弥生土器（後期）
10		散布地	丸亀市土器町	須恵器散布地
11		散布地	丸亀市土器町	須恵器散布地
12		散布地	丸亀市土器町	須恵器、土師器
13		散布地	丸亀市瀬野町	石器、石籠
14		散布地	丸亀市瀬野町	弥生時代～中世の土器散布地
15		散布地	丸亀市瀬野町	石器、須恵器
16		散布地	丸亀市瀬野町	石器、弥生土器、須恵器
17		古墳	丸亀市瀬野町	かつて数基存在。すべて消滅
18		古墳	丸亀市瀬野町	石室石材一部露出。堅穴式石室か？
19		石棺	丸亀市瀬野町	箱式石棺。消滅
20	高丸塚	塚	丸亀市瀬野町	
21		散布地	丸亀市土器町	土師器
22	行者塚古墳	古墳	丸亀市川西町	消滅
23		散布地	丸亀市郡家町御家	土師器散布地
24		散布地	丸亀市郡家町	土師器
25		散布地	丸亀市郡家町	須恵器
26	田村席寺	寺跡	丸亀市田村町道東	塔心礎（長径22m、短径1.9m、高さ84cm）
27	中ノ池遺跡		丸亀市金倉町	弥生時代前期、祭祀遺構、大溝
28	平山遺跡	散布地	宇多津町平山	ナイフ形石器、石核
29	聖通寺山古墳	古墳	宇多津町平山	積石塚、円墳（径20m）
30	聖通寺城跡	城跡	宇多津町坂下	山城。土塁、空濠など残存
31	平山城跡	城跡	宇多津町平山	山城
32	聖通寺跡	寺跡	宇多津町坂下西	平安時代創建
33	田毛野山古墳	古墳	宇多津町茶臼山	全長79mの前方後円墳
34	茶臼山遺跡	散布地	宇多津町茶臼山	ナイフ形石器、舟底形石器、尖頭器
35	青ノ山貝塚	貝塚	宇多津町西町	
36	西町遺跡	散布地	宇多津町西町	土師器、須恵器
37	伊勢町遺跡	散布地	宇多津町伊勢町	弥生時代～江戸時代の複合遺跡
38	丸山遺跡	散布地	宇多津町青ノ山	土師器

番号	遺跡名	類別	所在地	遺跡の概要
39	十束寺東遺跡	散布地	宇多津町十束寺	中世末～近世初頭の土器散布地
40	宇夫階神社跡	神社跡	宇多津町西町	1467年創建
41	神宮寺跡	寺跡	宇多津町西町	宇夫階神社の別当寺
42	安養寺跡	寺跡	宇多津町西町	本妙寺の末寺
43	本妙寺跡	寺跡	宇多津町西町	城郭伽藍の寺
44	弘徳寺跡	寺跡	宇多津町西町	
45	郷照寺跡	寺跡	宇多津町山下	
46	淨願寺跡	寺跡	宇多津町山下	淨願寺の前身
47	聖徳院跡	寺跡	宇多津町山下	
48	南路寺跡	寺跡	宇多津町山下	
49	安國寺跡	寺跡	宇多津町大門	細川頼氏建立
50	多聞寺跡	寺跡	宇多津町大門	細川頼之の居城跡ともいわれる
51	円通寺跡	寺跡	宇多津町大門	鎌倉時代建立
52	慈光寺跡	寺跡	宇多津町大門	
53	西光寺跡	寺跡	宇多津町網南	城郭伽藍の寺
54	普濟院跡	寺跡	宇多津町十束寺	細川頼之建立
55	十束寺跡	寺跡	宇多津町十束寺	
56	鍋谷道場跡	寺跡	宇多津町十束寺	西光寺の前身
57	法楽寺跡	寺跡	宇多津町本村西	

青ノ山は土器川と大東川に挟まれた沖積平野に所在する標高 224.5m の独立峰である。現在、青ノ山には23基の古墳が確認され、群集墳を形成している。青ノ山8号、9号墳は山頂部に立地する後期、及び終末期の古墳である。

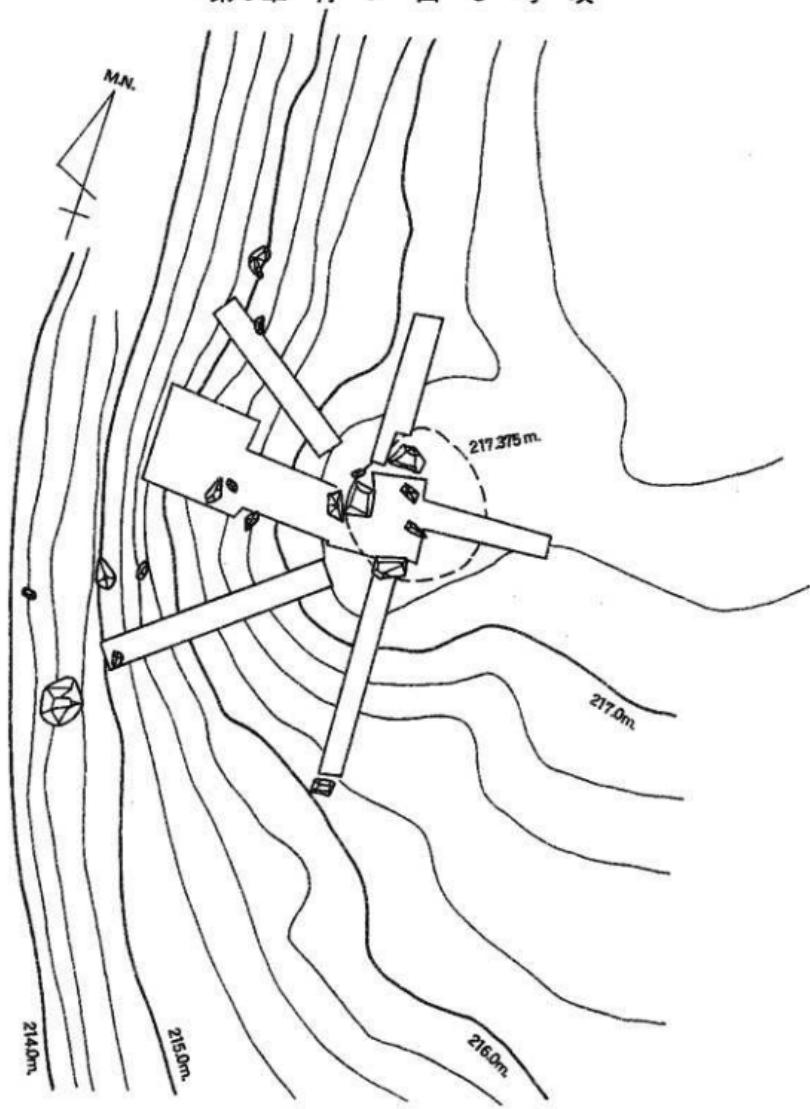
古墳は青ノ山以外に聖通寺山、茶臼山、飯野山などに築造されている。田尾茶臼山古墳（全長79mの前方後円墳）は青ノ山所在の吉岡神社古墳（全長50mの前方後円墳）とともに前崩古墳として著名である。中期には墓地公園東古墳、青ノ山2号墳が築造されたとされているが詳細は不明である。後期～終末期になると青ノ山には多くの古墳が築造され群集墳を形成している。

そのような古墳時代の隆盛は弥生時代における農耕経済の発展を基盤としていることは言うに及ばない。昭和56年度に発掘調査が実施され、祭祀遺構を検出し、多量の弥生土器を出土した中ノ池遺跡は三井遺跡（多度津町）、五条遺跡（普通寺市）とともに前期の遺跡として著名である。中後期の遺跡については調査がなく不詳であるが、飯野山西麓や青ノ山東南麓から弥生土器や石器が出土している。近年、道路工事現場などから丸亀平野各地で弥生土器が出土し、弥生時代における文化圏の広がりが確認されつつある。今後の調査に期待したい。

弥生時代以前の遺跡はあまり知られていない。

律令政治開始とともに、当該地域は那珂郡に属し、N30°W の条里制地割が施行された。田村庵寺、宝樹寺が建立されている。

第3章 青ノ山8号墳



第2図 青ノ山8号墳地形測量図



1. 墳丘

調査前の墳頂部には安山岩の部石が7個散在し、大きいものは12m, 13mを計測した。そのことから8号墳の主体部は横穴式石室であろうという予測ができた。

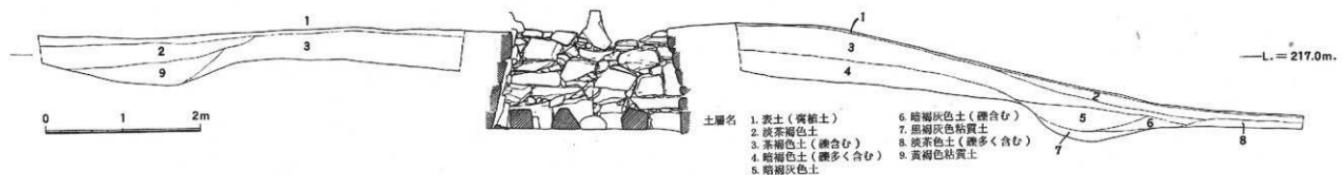
8号墳は青ノ山1号墳から南方約100mに位置する。しかし、その立地は山頂から南延する稜線上ではなく、西斜面上である。地形測量図からも216m以上の等高線は、それ以下の等高線同様に北部から直線的に下がるが、南東部にかけては緩やかに円弧を描いていたりと推測できる。さらに各等高線は第2図には表現されていない東側で変曲点があり、その点から右上がりになっている。即ち、8号墳は、稜線から西へ斜状に突出した緩斜面に築造されているのである。さらに地形測量図の観察を続けると216.5~217.25m間の等高線のみだけが確認できる。そのみだけは、南北トレンチ発掘調査で周溝に起因していることが判明した。

周溝の検出により8号墳の墳丘規模は周溝底内側計測で約125mという数値が算出された。さらに南、北トレンチの周溝間の中点は、玄空の中心に存在することが確認できた。ところで、墳丘規模、盛土状況を把握するためのトレンチは、5本設定し発掘した(第2図)。その結果、周溝が検出されたのは、前述の南、北トレンチだけである。周溝は地山を掘り込み形成されている。東トレンチでは、遊戯具が設定され、周溝予想位置までトレンチを延長できなかった。北西、南西トレンチでは、周溝は検出されなかった。以上より周溝は南、北トレンチと北西、南西トレンチ間で途切れたといふことが推定できる。全面発掘すれば、所謂、東向きの馬蹄形状溝が検出される可能性が高い。南トレンチの溝は幅1.6m、深さ30cm、底面には薄く黒褐色粘質土が堆積している。5~6層の土質は基本的には同質で、おそらく盛土が流出したものと思われる。土層序の縦引き根拠は主に角砾含有率である。8層は流下度の高い礫を最多に含む層である。溝底は、石室の床面とほぼ同レベルで216.0mを測る。北トレンチの溝は幅2m、深さ30cmを計測する。溝断面は南トレンチ同様、墳丘側の傾斜が急でシムメトリーではない。溝底のレベルは南トレンチより約65cm高いが、築造前の地形レベル差と考えて差し支えないように思われる。

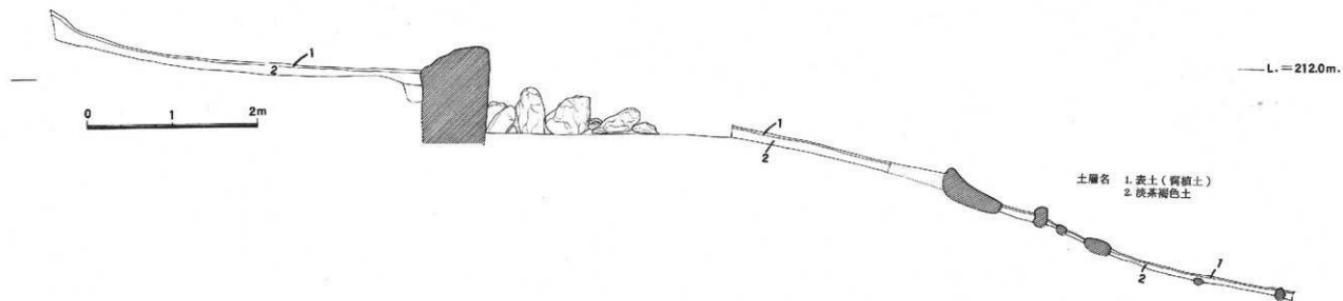
墳丘の盛土は、5cm前後の角砾を多量に含有した茶褐色土あるいは、暗褐色土である。盛土過程においては、一気に盛り上げられたと推定する。特別に版築工法、瓦層積み工法を実施したとは思われない。

掘り方が確認できたのは東トレンチである。石室基底石より約16~05mまでは傾斜角20°で、緩やかに削り、0.5~0.4mまでは傾斜角75°で掘削して地山整形を行っている。石室構築過程においては、裏込め石材はほとんど使用せず5~6層の平行土層、所謂、版築工法により石室主体部を補強している(図版17)。

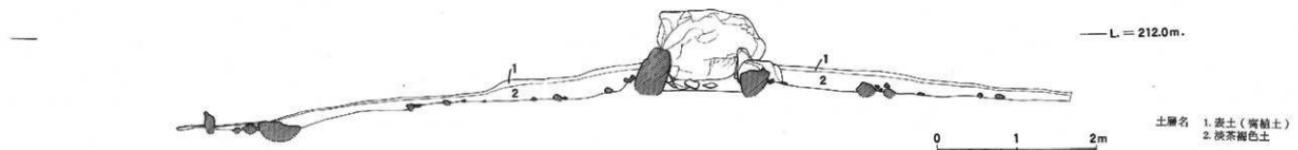
墳丘盛土からの出土遺物は須恵器の甕(第6図①), 土師器片, 弥生土器片(第6図②~④)である。須恵器の甕は南西トレンチ及び、南西トレンチと南トレンチ間の現墳丘上から出土し、その出土位置は墳丘裾部に該当する。口頭部から体部にかけての破片が多数出土している。その外側は平行タタキ目、内面は同心円タタキ目が施され器面調整されている。祭祀的な行事に使用したものであろうか。土師器は竈形土器体部の破片が数片、弥生土器は壺形土器の口縁部、体部などや高杯の脚部の破片が数片、出土している。実測図②, ③は壺形土器である。口縁部木輪が



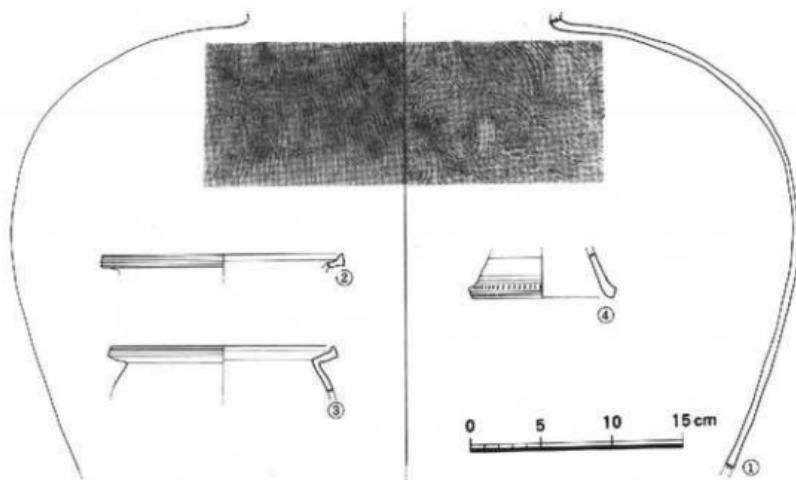
第3図 青ノ山8号墳石室断面図及び南北トレンチ土層序実測図



第4図 青ノ山9号墳縦断面実測図



第5図 青ノ山9号墳横断面実測図



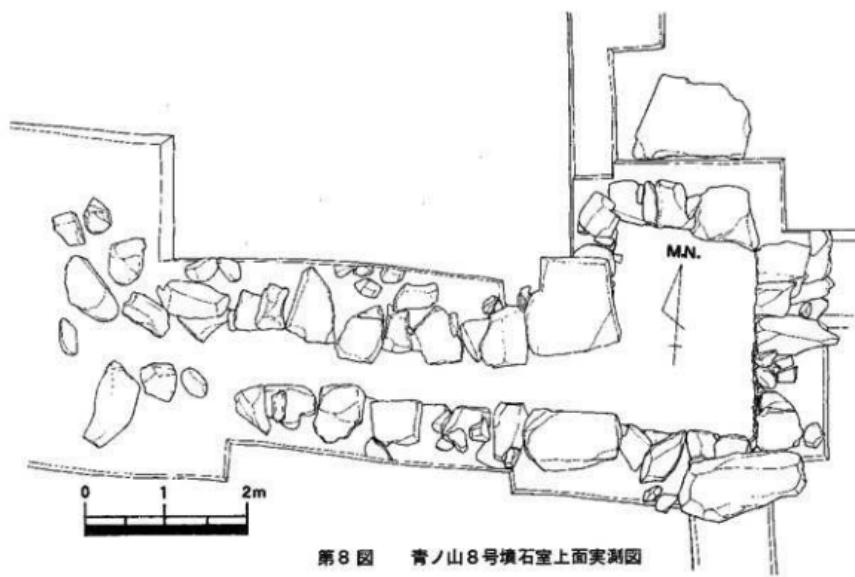
第6図 青ノ山8号墳出土遺物実測図

折り返し手法で拡張され、その部分に凹線が施される。④は高杯の脚部である。高橋謙氏編年の第4様式に該当し、弥生時代中期後半に比定できる。

⁹¹ 弥生土器は今回の発掘調査における副産品である。さて紫雲出山、源氏ヶ峰、台山など海岸近くの山頂から、⁹² 弥生時代中期の土器が多量に出土している。それらは高地性集落と呼ばれ、戦略基地的な性格をもった遺跡である。青ノ山も同様な基地的性格をもつ高地性集落遺跡と考えられる。因に、青ノ山山頂からは近年、発掘調査を実施した弓島、羽佐島、岩黒島、櫛石島など備瀬瀬戸の島々や対岸の岡山県児島半島なども鳥瞰できる。



第7図 青ノ山山顶からの展望



第8図 青ノ山8号墳石室上面実測図

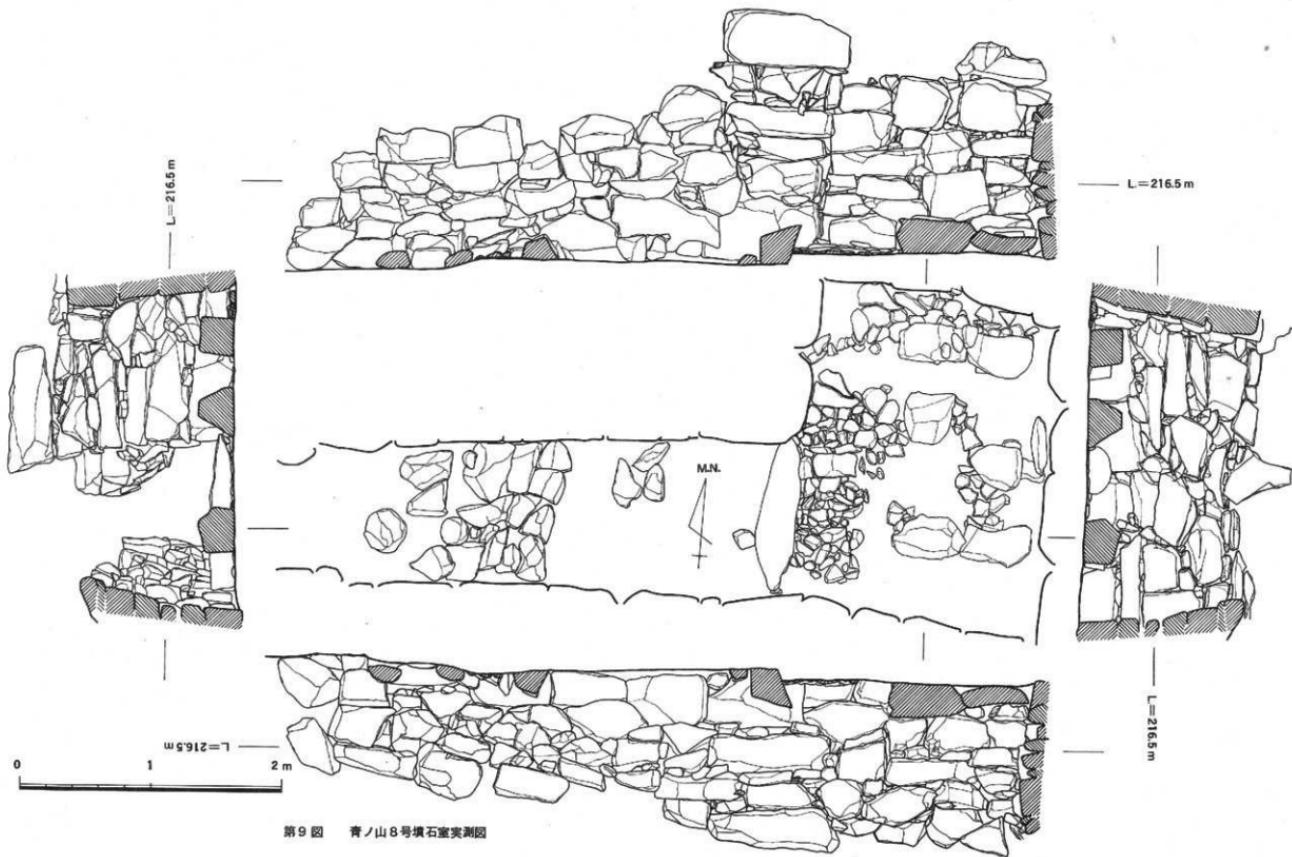
2. 埋葬主体

地山整形は、西斜面を等高線に対し垂直方向に掘り込んで削平し、石室構築の基礎を築いている。玄室は14の基底石で構成され、内法 $18\text{m} \times 24\text{m}$ の平面プランを呈している。特徴ある基底石は玄室と羨道に跨る兼用石である。それは約 $70\text{cm} \times 70\text{cm} \times 40\text{cm}$ の大型平板石材で、平面プランの基準石と思われる。と同時に横長に据えることによって横長の2面を利用し、かつ安定感を与えていている。その上部にも同様の大型平板石が5個積み上げられている。それらは石室構築時にレベルを整える手順となっているようだ。羨道は奥門付近が破壊され、長さ等の規模は不明である。現存長4m、幅10m～12mで羨道幅は漸次、減じられている。

石室平面プランは玄室南壁と羨道南壁が一直線となる片袖形であるが、玄室の短辺側と羨道壁が連続するのは特異である。昭和51年に青ノ山南裾部で発掘調査を実施した青ノ山6号墳も類似の平面プランでL字形石室という呼称で報告されている。

石室石材は全て安山岩である。玄室は5～6段の横口積みで整然と構築され、間隙には丁寧に詰石を充填している。羨道部の石材は形、大きさとともに多様で面取りも不規則であり、壁は凹凸を生じている。羨道北壁は根の圧迫により羨道側へせり出している。玄室と比較すると構築は粗雑である。石室構築は持ち送り方式が採択されている。

玄室床面には平坦な5～30cmの自然石が全面に貼付されていたと思われる。しかし調査時には、



第9図 青ノ山8号填石室実測図

仕切石付近と玄室北壁際に遺存しているにすぎなかった。盗掘などによる擾乱のためと推察している。敷石は重なり合いがなく一面で、ほぼ同レベルを計測している。敷石は羨道には検出されなかった。

玄室には6個の棺台石と思われる石材が $1.1m \times 1.8m$ の範囲に遺存している。大きさは一様ではないが、上面に平坦面を有するのが共通する特徴である。平均的数値は $30cm \times 40cm \times 25cm$ である。棺台石は南北方向に2列配しているが、東側列の上面レベルが6~7cm低い。2遺体を安置したのであろうか。木棺を使用したと思われるが鉄釘など木棺に関わる遺物は検出されなかった。

玄室と羨道を隔する仕切石は長 $1.2m$ 、幅 $20\sim 30cm$ 、高さ $20\sim 30cm$ を計測する。上面は平坦面であるが、羨道側へ少し傾斜している。遺物はこの仕切石周辺に多く出土している。踏切石としての機能以外に祭祀祭壇的な機能を有していたのかもしれない。

羨道には多数の転落石があり、閉塞石と判断することが困難であった。しかし、圓化した石群を閉塞石と考えた。それらの状況は、仕切石から $18m$ 離れた所にほぼ一直線に並ぶ4石があり、その西側の幅 $12m$ に十数石が存在している。

羨門付近は精査したが羨門石の位置、墓道などはわからなかった。ただ、刀子、須恵器の杯が羨門と推定する付近から出土しており、墓前祭祀跡を彷彿させる。



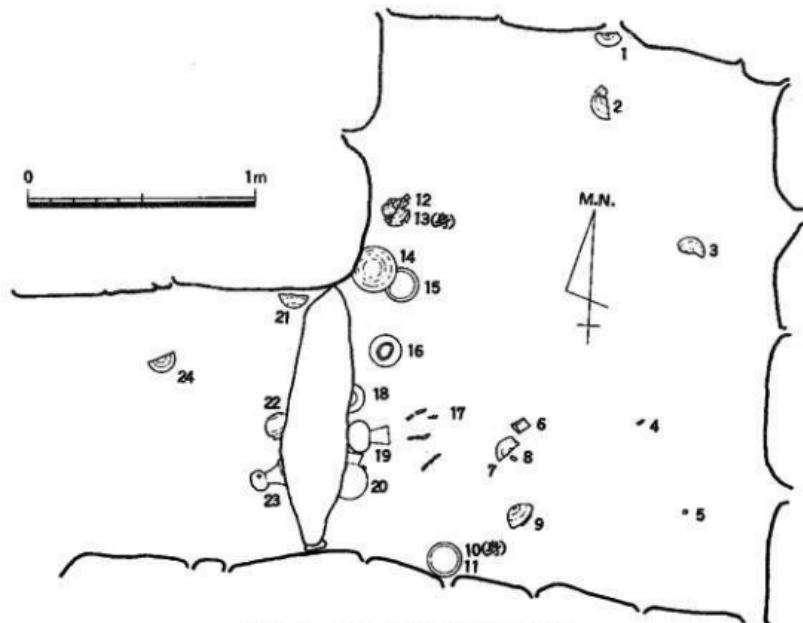
石室



玄室

第10図 青ノ山8号墳石室

3. 遺物出土状況



第11図 青ノ山8号墳遺物出土状況図

第11図は玄室及び、羨道の一部における遺物の出土状況を示している。遺物は他に羨門付近やトレンチなどからも出土している。

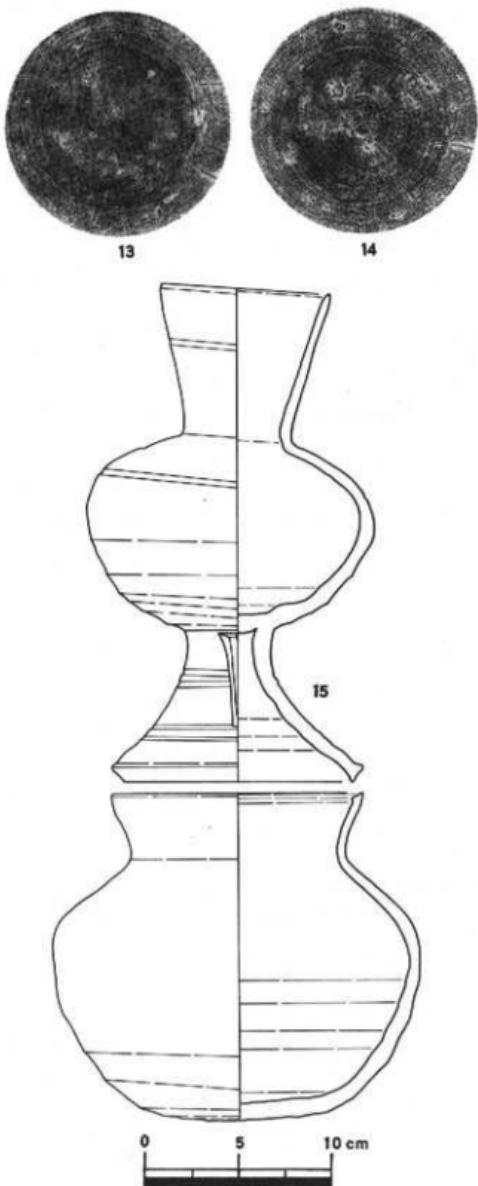
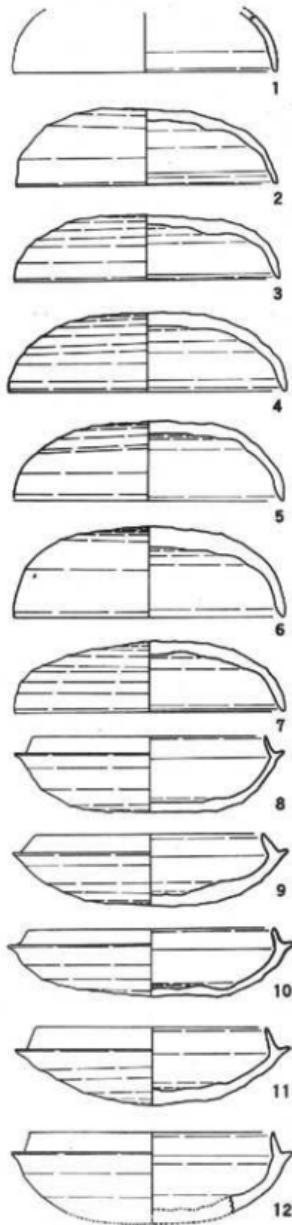
出土状況の特徴は、仕切石を中心に遺物が配置されていることである。完形品である提瓶、台付長頸壺、有蓋短頸壺は玄室側で、また無蓋短頸壺、甌は羨道側で仕切石に接し原位置を保っていると思われる。仕切石から離れる遺物は杯が多く、そのほとんどが半壊している。また、それら(第11図 2, 3, 6, 7, 2124)の出土したレベルは床面より約15cm高い。さらに7と24の杯は接合できるなどから、それらは原位置を保持しているとは言い難い。

1は短頸壺の蓋であるが、偶然にも東トレンチの右室基底石裏側から接合可能な破片を出土した。そのことは本墳築造の初期段階、即ち、石室の基底石を設置した頃に、蓋の半分を玄室に、残り半分を玄室外に投じたという事實を物語っている。8号墳築造時期はその行為時であると断定できる。でも、なぜそのような行為をしたのだろうか、謎である。

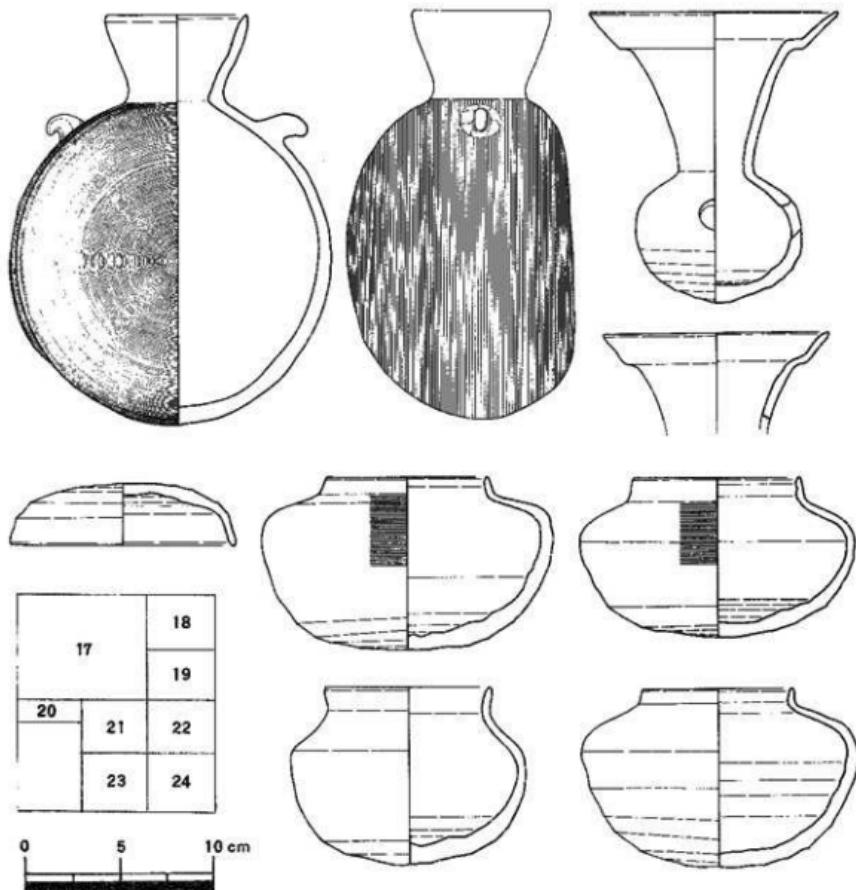
4, 8は管玉、5は金環、17は鉄製品(鉈鎌)である。6は器台の可能性もある。10, 11は杯の身と蓋で、蓋が下、身が上という重なった状態で出土したがセット関係にはならない。12, 13は正常に蓋された状態で、セット関係にある。

羨門付近からは刀子、杯、墳丘裾部からは須恵器の甌が出土し、墓前祭祀的色彩が強い。

4. 出土遺物



第12図 青ノ山8号墳出土須恵器実測図(No.1)



第13図 青ノ山8号墳出土須恵器実測図(No.2)

(1) 須恵器(第12,13図)

① 蓋・杯(1~14)

1~7は杯蓋、8~12は杯身である。1,12の小片、7の $\frac{1}{2}$ 片以外は完形或いは接合復原により完形に近い状態にある。1,2は器壁が薄く口縁端部内側に後を持つことでやや古い様相を呈している。3は天井部が扁平で外面に「×」のヘラ記号を有す。4,5はとともに天井部から口縁部にかけてなだらかに下る。6は器壁が厚く、重量感がある。天井部のヘラ削り範囲は少程度で狭い。器高は高く、口縁部が直立に近い。7は口縁端部内側にヘラ状工具による沈線を廻している。全体的に歪みがある。8は器壁が薄く精巧である。器面は胎土にほとんど

砂粒を含まないため非常に滑らかである。焼成は良好で堅緻である。8の特徴は2についてもいえる。クロ回転方向は2と8が左で、他は全て右である。また2と8は重なり合った状態で出土している、などから明らかにセット関係にあるといえる。9の底部外面には「X」のヘラ記号がある。3とは出土位置が異なるが胎土、焼成、色調とも類似しているのでセットと考える。10は器高が低く扁平である。11は5と胎土、焼成、色調などが類似しているのでセットと考えたい。12は器壁が厚く、全体的に重みがある。5とセットか。13,14は3,9のヘラ記号拓影図である。

以上、個体数は杯蓋7、杯身5でそのうちセット関係にあると考えられるものが4組である。従って全てセットで調査されたと仮定すれば、少なくとも8組以上ということになる。

② 台付長頸壺(15)

器高は26.5cmを計る。高さ18.5cmの丸底長頸壺に大きく開いた台部が貼付けられている。口頸部は直線的で瓶体部最大径は中央よりやや上位にある。口頸部の上位¹⁵及び肩部には浅いが凹線が一条廻っている。台部には細長い長方形の透し窓が3方向に穿たれている。透し窓の中央とその下部には2条の凹線が廻っている。長頸壺と台部との接合状態が中離線からずれており、アンバランスな様相を呈している。母神山古墳群千尋支群第6号墳から類似のものが出土している。

③ 直口壺(16)

口頸部は短く、外反するが端部近くで内彎する。端部は平坦面が内傾し断面が三角形を呈する。体部は頸部から肩部、肩部から底部にかけてやや直線的であり底部も平坦に整形している。底部外面には指頭圧痕が顯著である。器高17.4cm。

④ 提瓶(17)

口縁部は短く、内彎気味にのびる。鉤状の把手は退化段階途上にある。体部前面は接合部より約8cm張り出し緩やかな弧状を呈するが背面は平坦である。体部は径17.1cmで回転カキ目調整が施されている。整形、調整ともやや粗雑である。器高21.8cm。

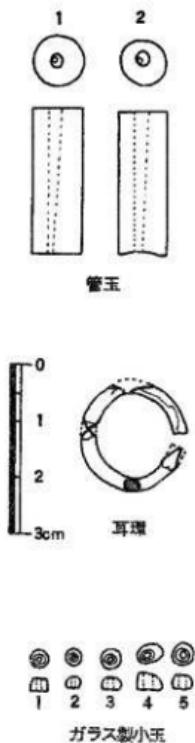
⑤ 蓋(18,19)

18は完形で羨道側の仕切石に接して出土している。口頸部は締った基部からラッパ状に大きく開き、端部で段をなす。体部は球形で最大径は、ほぼ中央に求められる。円孔は径1.6cmで上方から下向きに穿たれている。19は口頸部だけ出土したものであるが、その特徴から18と同様の形態であろうと思われる。

⑥ 短頸壺(20~24)

20は短頸壺の蓋である。前述したが、玄室奥壁から片、東トレンチ玄室基底石裏側から3片が出土し、偶然にも接合したものである。やや平坦な天井部から口頸部は「く」字形に屈曲している。暗い灰青色で口径11.7cm。21,22,24は有蓋短頸壺。口頸部が短く、体部上位で肩を強く張り出した扁平な形態は共通している。21,24は蓋をした状態で焼かれた痕跡がある。21,22の肩部は回転カキ目調整。23は無蓋短頸壺。焼成は軟質で淡黄灰色である。口頸部は外反気味に立ちあがり、端部は厚味を増し丸くおさめている。口頸部から肩部にかけてはなだらかである。器高9.4cm。

須恵器の特徴については、須恵器観察表(第3,4表)にまとめているので参照されたい。



第14図 青ノ山8号墳出土装身具実測図

ガラス製白玉計測値 (mm)				
番号	径	長	孔径	色調
1	8.1	7.0	2.0	紺色(不透明)
2	9.8	6.2	3.2	紺色(不透明)
3	10.1	5.0	2.3	紺色(不透明)
4	8.4	6.0	1.0	紺色(不透明)
5	8.1	6.7	1.8	紺色(不透明)
6	8.1	4.4	1.0	紺色(不透明)
7	6.5	4.5	1.7	紺色(不透明)
8	8.5	5.0	2.4	紺色(不透明)
9	8.3	7.0	1.8	紺色(不透明)
10	7.1	5.5	1.3	紺色(不透明)
11	6.8	6.5	1.0	紺色(不透明)

管玉計測値 (mm)				
番号	径	長	孔径	色調
1	9.5	26.0	1.0~2.2	濃い緑色
2	8.5	25.5	1.1~2.6	濃い緑色

ガラス製小玉計測値 (mm)				
番号	径	長	孔径	色調
1	4.4	2.2	1.0	淡黄色(不透明)
2	3.0	2.1	0.8	黄色(不透明)
3	3.8	2.1	1.0	黄緑色(不透明)
4	4.6	3.2	1.5	淡灰青色(不透明)
5	4.0	2.8	1.4	淡紺色(不透明)

耳環計測値 (mm)				
番号	径	断面径	切口幅	色調など
1	20.0	2.5	2.0	細身の鋼心に金箔。但し金箔はほんの一部のみで、全体に錆化が著しく淡い緑青を生じている。

第2表 装身具計測一覧表

(2) 装身具類 (第14図)

① 管玉

2個出土。計測値によれば径、長、孔径ともにほぼ同じ大きさである。孔は一方から穿れた傾孔である。截面は2の片方が漏斗状に凹んでいる以外は平坦でよく研磨されている。碧玉製で濃い緑色。

② ガラス製白玉

11個検出。色調は全て不透明の紺色である。大きさは径6.5~10.1mm、長4.4~7.0mmで個々にはらつきがあり不揃いである。形状も個性的で平面鏡で円形、隅丸方形、隅円形など、側面鏡で直線型、円弧型、左右アンバランス型などを呈している。穿孔は一方からなされている。

③ ガラス製小玉

5個検出。5個の計測値幅は径3.0~4.6mm、長2.1~3.2mm。色調は全て異なるが黄色系統3、青色系統2に分類できる。

④ 耳環

玄室南東隅付近から1点出土。径2cm、断面径2.5mm。2箇所で折れていて3片よりなる。細身の鋼心に金箔を渡金している。表面は金箔がほとんど剥離し、錆化による淡い緑青をふいていている。

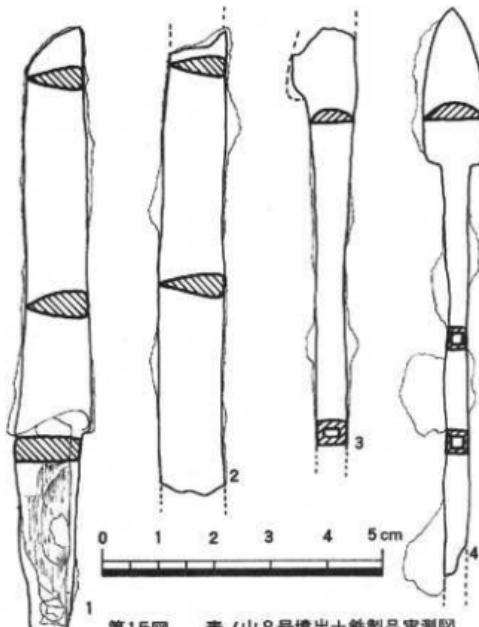
(3) 鉄製品(第15図)

① 刀子(1.2)

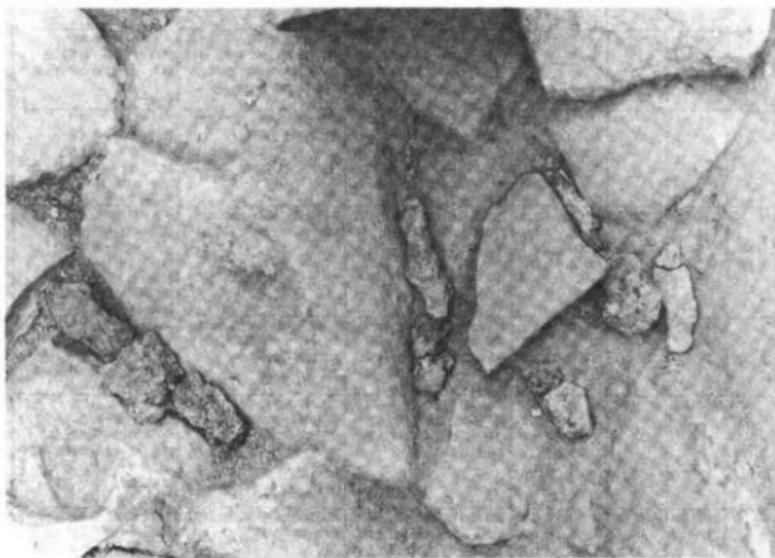
2点出土。1は完形で刃長72cm、刃幅1.2cm、茎長3.5cmを計る。茎には木質が付着している。2は刃部の一部である。刃幅は1とほぼ同幅の1.2cmを計るが、刃長は長くなりそうだ。

② 鉄鎌(3.4)

完形のものは出土していない。3は鎌身部の大半及び茎部を破損している。鎌身部の形状は刀子式と思われる。鎌被部は断面長方形で長い。4は鎌身部が完存している。鎌身部は剣先状を呈し、片丸造りである。鎌身長28cm、鎌身幅1.0cm。



第15図 青ノ山8号墳出土鉄製品実測図



第16図 青ノ山8号墳出土鉄製品出土状況

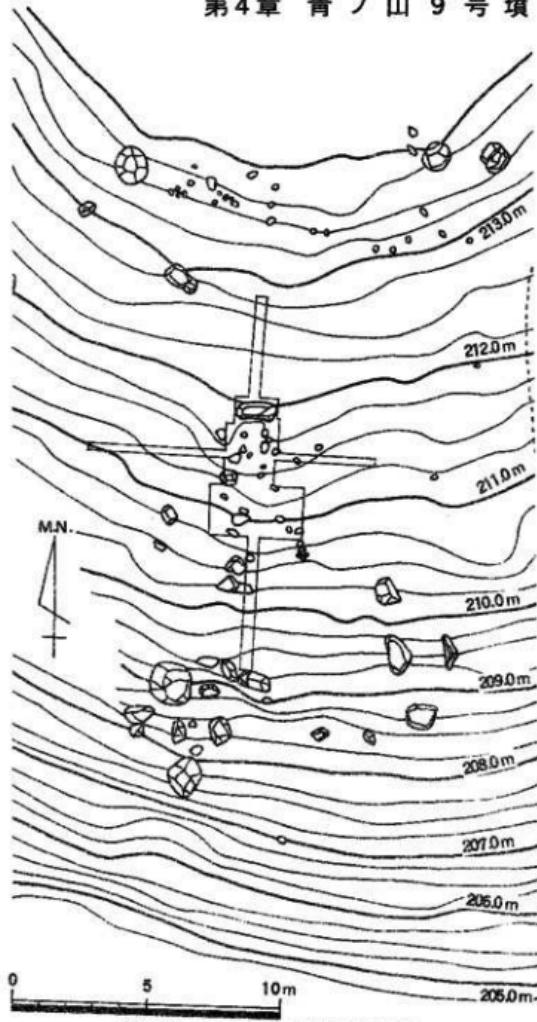
第3表 青ノ山8号墳出土須恵器観察表(No.1)

灰類番号	回数番号	名 称	出土地点	法量(cm)	形 番 の 特 約	手 法 の 特 点	備 考
1		蓋杯(20)	南 室	口 径 1.4 器 高 4.0 (全て復原品)	器底は鋸い。口は端部内側に は破綻が確認できる。	残存部はすべて回転ナゲ調節。 他の回転ナゲ調節。	ロタ回転 方角不明 色調 内外面-青灰色 胎土 1~2mmの砂粒を若干 含む 焼成 良 灰身焼成度
2	2 4 (1)	蓋杯(20)	北 室	口 径 1.9 器 高 4.1	器底をためシャープでスマート である。口縁端部内側には 段を行す。	天井部外側回転へラ削り調 整。他の回転ナゲ調節。	ロタ回転 左方向 色調 内外面-青灰色 胎土 1~2mmの砂粒を含む 焼成 良好 灰身焼成度とセット 天井部外側に×のハラきを施す
3	2 4 (1)	蓋杯(20)	北 室	口 径 1.4 器 高 3.5	器高が低く、やや扁平な底が ある。口縁端部内側には若干 後い状態が走る。	天井部外側回転へラ削り調 整。他の回転ナゲ調節。	ロタ回転 右方向 色調 内外面-青灰色 胎土 2~3mmの砂粒を含む 焼成 良 灰身焼成度とセット 天井部外側に×のハラきを施す
4	2 4 (1)	蓋杯(20)	北 室	口 径 1.8 器 高 4.2	天井部から口縁間にかけて全 体的にだらかに下り。口縁 端部は丸い。	天井部外側回転へラ削り調 整。他の回転ナゲ調節。	ロタ回転 右方向 色調 内外面や底-青灰色 胎土 3~4mmの大砂を若干含む 焼成 良
5	2 4 (1)	蓋杯(20)	玄関及び 奥門付近 の底面	口 径 1.4 器 高 2	口縁部は天井部に比して器壁 が薄くなだらかに下る。端 部付近でやや内巻す。	天井部外側回転へラ削り調 整。他の回転ナゲ調節。	ロタ回転 右方向 色調 内外面-青灰色 胎土 2~3mmの砂粒を含む 焼成 良 灰身焼成度とセット
6	2 4 (1)	蓋杯(20)	上門付近 の底面	口 径 1.4 器 高 4.8	器壁が厚く、重豈感がある。 器底が高い。口縁部は八字形 で底部は丸い。	天井部外側回転へラ削り調 整。他の回転ナゲ調節。	ロタ回転 右方向 色調 内外面-青灰色 胎土 1~2mmの砂粒を若干含む 焼成 良 灰身焼成度とセット
7	2 4 (1)	蓋杯(20)	奥門付近	口 径 1.4 器 高 3.8	口縁部はやや内巻しながら下 がる。端部は丸くおくれるが、 内側にはハリ工具による鋸く 割れが走る。全体的に歪 みがある。	天井部外側回転へラ削り調 整。他の回転ナゲ調節。 付属の回転ナゲ調節を組みて、 外側は底状を呈している。	ロタ回転 右方向 色調 内外面-青灰色 胎土 1~2mmの砂粒を若干含む 焼成 良
8	2 4 (1)	蓋杯(20)	北 室	口 径 1.2 器 高 4.0 受底部 1.4 たもあがり高 たりあがり高 0.8	器壁が薄く、筋筋である。た もあがりは極めて薄く、外反 ぎみが内巻する。内側のた もあがり基部にへラ状に凹で提 がれる。受底部はやや上方 にのびる。	此部は回転調節へラ削り調 整。他の回転ナゲ調節。	ロタ回転 左方向 色調 内外面-青灰色 胎土 1~2mmの砂粒を含む 焼成 良 灰身焼成度とセット
9	2 4 (1)	蓋杯(20)	高門付近	口 径 1.2 器 高 3.8 受底部 1.4 たもあがり高 1.0	たちあがりは太く(底面)、 内側する。受底部は丸く、水 しきにのびる。	底部外側回転へラ削り調 整。他の回転ナゲ調節。	ロタ回転 右方向 色調 内外面-青灰色 胎土 1~5mm 焼成 良 底部外側に×のハラきを施す 灰身焼成度とセット
10	2 4 (1)	蓋杯(20)	北 室	口 径 1.3 器 高 4.2 受底部 1.5 たもあがり高 0.8	たもあがりは斜めから内側する。 受底部は斜めから水平で、底盤は 丸い。全体的に器底が薄く、 特に底部は薄い。器高が低い ため底重な感じがする。	底部外側回転へラ削り調 整。底部外側には自然輪がかかる。	ロタ回転 右方向 色調 内外面-青灰色 胎土 1~2mmの砂粒を含む 焼成 良
11	2 4 (1)	蓋杯(20)	北 室	口 径 1.2 器 高 4.2 受底部 1.4 たもあがり高 1.2	たもあがりは比較的のくび直 感的である。受底部は斜め上方へ のびる。底部は丸みがあり深 みを感じる。	底部外側回転へラ削り調 整。他の回転ナゲ調節。	ロタ回転 右方向 色調 内外面-青灰色 胎土 1~2mmの砂粒を含む 焼成 良 灰身焼成度とセット
12		蓋杯(20)	南 室	口 径 1.0 器 高 4.5 受底部 1.5 たもあがり高 0.8	全体的に器壁が厚く、重豈感 がある。たもあがりは内側し てのびるが端部で外側する。 受底部は太く短く、まことに	底部外側回転へラ削り調 整。他の回転ナゲ調節。	ロタ回転 右方向 色調 内外面-青灰色 胎土 1~2mmの砂粒を含む 含む

第4表 青ノ山8号墳出土須恵器被覆表(No.2)

試験番号	試験番号	名 称	出土地点	法 直(=)	形 状 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
				1.1 (全て復原始)	り出す。		焼成 良 外表面糊状 結構もとセッカ ロタリ回転・右方向 色調 内外面・青灰色 粒上 2~3mm程度の砂粒を若干 含む
15	2.5②	台形復原 壺	支 宅	口 径 8.9 器 高 2.6 口部底径 6.0 口部底高 5.8 体部底径 15.5 体部高 8.0 底径 6.2	口部は直(=)形のもの、端部 は丸足をもつ。口部底中央や 上方に内縫には各2箇所の 凹凸がある。口部はレリ フタ式によるもので、レリフ タ式に大きく広がり、内縫部で 接続する。口部には、最も長い 扇形の突起を3方向に差し立 している。スカルプの中央上 下部には各々2箇所の凹凸が くっている。台形の位置が長 期ぶりの物種とされ、全体的に にアンソラクスを想起させる。	体部外表面は口部にへり削り調 整。底は斜面ナゲ調。底部 外表面には横筋伝承が認められ る。	焼成 良 一部に自然施かかかる
16	2.5②	直 口 壺	支 宅	口 径 13.4 器 高 17.4	口部は直(=)形のものであるが 中央で内縫を有する。内縫 は平行である。その上部は2 段に突起があり、下部には 突出した段を有する。底部は やや平坦に仕上げている。脚 部は広くとくらみなどない ある。	体部外表面は口部にへり削り調 整。底は斜面ナゲ調。底部 外表面には横筋伝承が認められ る。	ロタリ回転・左方向 色調 内外面・青灰色 粒上 4~5mm程度の砂粒を少し 含む
17	2.5④	橢 圭	支 宅	口 径 7.2 器 高 2.8 基盤径 5.2 体部底径 17.1 体部厚さ 2.0	口部は比較的丸く、内縫 のみに限らず、縫部は丸い。 手は延長し、カキ形の突起を 有する。	は瓶型及びカキ形突起はハリ フタによる。体部外表面は全面 に斜面カキ形調。口部は斜面 ナゲ調。	ロタリ回転・右方向 色調 内外面・青灰色 粒上 1~5mmの砂粒を含む 焼成 良
18	2.5③	玄門部付 近の表裏	粘	口 径 13.3 器 高 1.65 基盤径 4.0 体部最大径 18.8 体部厚さ 1.6	口部は直(=)形で細く、ツバ 状に外反し、端部は段を有す。 その最大 径は口部よりも大きい。 底部は大径のやや上部にあたる外 方から下方方に穿孔されてい る。	体部外表面は口部にへり削り調 整。底は斜面ナゲ調。	ロタリ回転・右方向 色調 内外面・青灰色 粒上 砂粒や多く含む 焼成 良
19		物 底 壺	復原口径12.0		口部は同じ様な形態であると思 われる。口部はツバ状に 外反し、底部は段を有してい る。	復原部はすべて斜面ナゲ調。	ロタリ回転 方向不明 色調 内外面・淡灰色 粒上 砂粒など含まない 焼成 良
20	2.4④	有脚壺	支 宅及び 表土	口 径 11.1 器 高 3.3	口部は直(=)や平坦な天津部から なく「丁字形」に上がる。	天津部はすべて斜面ナゲ調。	ロタリ回転・右方向 色調 内外面・灰白色 粒上 1~2mmの砂粒を含む 焼成 良
21	2.5②	火蓋取附 壺	支 宅	口 径 8.6 器 高 9.2 体部最大径 15.6	口部は直く、内縮する。 体部上面に強く張り出した肩 を有す。	肩部から体部中央にかけて斜 面カキ形調。底部外表面は 斜面ナゲ調。底は斜面 ナゲ調。底として形成した 底部あり。	ロタリ回転 右方向 色調 表面削り方程・淡灰色 底は暗緑色 粒上 3~4mmの砂粒を少し含む 焼成 良
22	2.6③	有脚圓錐 壺	支 宅	口 径 9.8 器 高 6.6 体部最大径 14.6	口部は直く、内縮する。 体部上面にやや張り出しした 肩を有す。底部は底円形を呈し、底部のみ を示している。	肩部から体部中央にかけて斜 面カキ形調。底部外表面は 斜面ナゲ調。底は斜面 ナゲ調。	ロタリ回転 右方向 色調 外表面削り口部頃 ~淡灰色 底は暗緑色 粒上 2~4mmの砂粒を若干 含む 焼成 良
23	2.5④	無蓋加厚 壺	玄門部付 近の表裏	口 径 8.6 器 高 9.4 体部最大径 12.5	口部は直く、やや外反する。 肩はあまり張り出さず、底部 に至る。	底部外表面は斜面ナゲ調。 底は斜面ナゲ調。	ロタリ回転 右方向 色調 淡灰色 粒上 1~2mmの砂粒を若干 含む 焼成 不良
24	2.6③	有脚圓錐 壺	支 宅	口 径 9.0 器 高 5.5 体部最大径 14.6	口部は非常に直く、直立す る。各肩に肩にやや張り出 した肩を有す。体部は小枝から 下位にかけてはややくらみ を感じさせる。	底部外表面は斜面ナゲ調。 底は斜面ナゲ調。蓋をして 焼成した底部有り。	ロタリ回転 右方向 色調 内外面・青灰色 粒上 1~4mmの砂粒をやや 多く含む 焼成 良 底面に自然施

第4章 青ノ山9号墳



第17図 青ノ山9号墳地形測量図

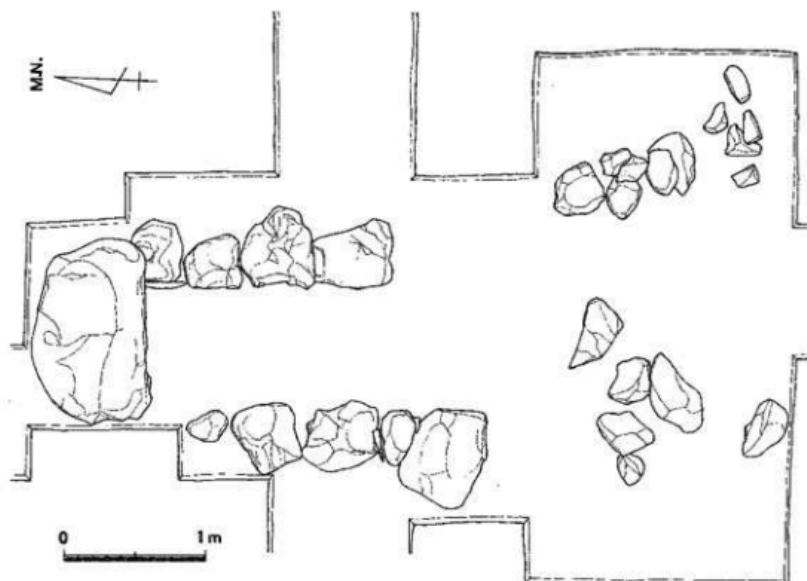
青ノ山9号墳は青ノ山8号墳より南へ約40m下った尾根筋にあたる標高211mの緩斜面に築造されている。

発掘調査前の地形観察では、墳丘は西～南に僅かであるが残存している感があった。そのことは地形測量図でも窺える。しかしトレントの土層観察からは確認できなかった。本来の墳丘盛土は完全に自然流失したと判断したい。このように墳丘は不明であるが、築造時の規模は石空規模などから10m程度であつただろうと推定する。

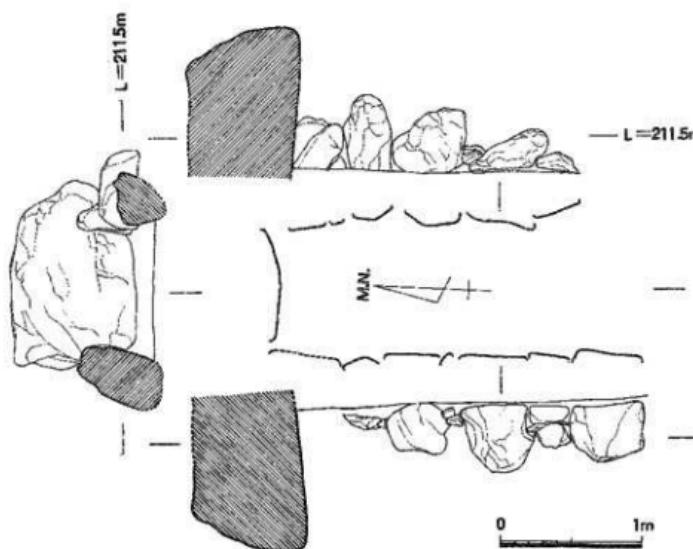
埋葬主体は横穴式石室である。石室の主軸は南北方向であり、開口方位は南である。現存する石室規模は玄室長2.6m、幅0.9m、羨道部は不明である。地山を断面し字形に削削することにより古墳築造基盤を築いている。横1.4m、高さ0.85m、奥行き0.8mを計測する奥壁石はその最奥部へ安定感よく据えられている。側壁石は奥壁石を支えるように設置され、内面が直線になるように構築設計されている。側壁石は大きいものでも40cm程で比較的小さな安山岩が使

用されているといえる。芯底石だけの遺存のため上部の状況は不明である。床面は削平面を叩きしめただけで敷石等の特別工作はしていない。出土遺物は皆無である。

築造時期は出土遺物がないので明確でないが、石室規模、立地状況などから古墳時代終末期と推定している。



第18図 青ノ山9号墳石室上面実測図



青ノ山9号墳石室実測図

第5章 青ノ山に所在する古墳について



第20図

青ノ山所在の古墳

第5表 青ノ山古墳群一覧表

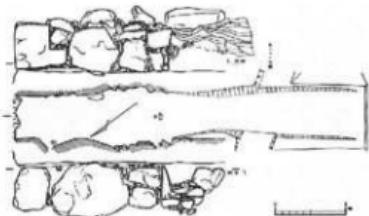
古 墓 名	支 群 名	墳 形 (規模m)	標 高 (m)	開 口 方 位	石 室 (m)			石室平面プラン	築造時期	発掘調査の実施	副 著 品	備 考
					全 長	玄 室 長さ×幅×高さ	義道 長さ					
青ノ山1号墳	山 旗 支 群	1号 方 墳 (15)	2.20	南	6.0~	2.5×1.5×1.5	3.5	両 袖	6C末		須恵器(杯、高杯)、金環、鉄釘	整備保存
青ノ山8号墳		2号 円 墳 (12)	2.17	西	6.5~	2.5×2.0×1.6~	4.0	片袖(L字形)	6C後半	昭和57年度	須恵器(杯、短頸壺、直口壺、台付長頸壺、提瓶、短刀子、鉄鏡、金環、玉類(管玉、ガラス玉))	整備保存
青ノ山9号墳		3号 円 墳 (10)	2.11	南	-	2.0×1.0	-		終末期	昭和57年度	なし	整備保存
青ノ山宇多津2号墳		4号 円 墳 (10)	2.09	南 東	-	2.5×1.3×1.8			終末期			整備保存
		6号 円 墳	2.02		-	3.0×1.0			終末期			S58発見 基底石石列が遺存
青ノ山宇多津5号墳		5号 円 墳 (10)	1.90	南	6.2~	3.2×1.2×1.3	3.0	無袖に近い両袖	7C中葉	昭和57年度	須恵器(杯)、耳環、鉄釘、人骨(脛骨、上脚骨、大脚骨、頭蓋骨片、助骨片)	整備保存
青ノ山2号墳		7号 -	1.50		(2.85×0.5~0.7×0.65)			(壓 穴)			須恵器(盃)、耳環、鉄釘	
宝 墳 古 墳	宝 墳 支 群	1号 円 墳	5.0						6C後半 ~ 末		須恵器(杯、長頸壺、平瓶)、鉄刀、刀子	石室側石の石列が遺存
		2号 円 墳 (25~30)	6.8									墳頂と石室石材あり
		3号 -	6.5					(箱式石棺)				石棺石材露呈(5石)
		4号 円 墳	3.8	西	6.6~	4.2×3.0	2.4				須恵器(杯、提瓶など)	
	西 露 鹿 支 群	1号 -	1.38	北	6.1~	3.3×2.4	2.8	片袖か?	6C末		土師器(高杯)	S58発見 石室と材運呈
		2号 -	1.12	北	3.6~	2.2×1.3	2.3	片袖				S58発見 石室露呈
		3号 -	1.0								須恵器	
青ノ山3号墳	墓地公園 西 支 群	1号 円 墳 (15)	1.8						6C後半			側壁石、天井石が露出
青ノ山4号墳	南 露 鹿 支 群	4号 円 墳 (12)	2.6	南南西		幅1.4			6C後半			S58発見 2石露呈
		3号 円 墳	3.0									
青ノ山5号墳		2号 円 墳	3.0	南南西	7.5~	3.5×1.6~1.7×1.7	4.0	両 袖	6C後半			
青ノ山6号墳	電線 支 群	1号 円 墳 (11)	5.2	西南西	4.6~	2.2×1.4×1.5	2.4	片袖(L字形)	6C後半	昭和51年度	須恵器(杯、短頸壺、広口壺、長頸壺、提瓶)、武具(太刀、鉄扇)、馬具、玉類(管玉、ガラス玉)	整備保存
青ノ山7号墳		1号 円 墳 (25)	5.0	南 西	9.5~	3.8~3.9×2.4×2.5	5.7	両 袖	6C後半	昭和54年度	須恵器(杯)、高杯、長頸壺、土師器、金環	消滅
青ノ山墓地 公園東古墳		1号 円 墳	8.8					(箱式石棺)	5 C		ガラス玉4個	
	東 露 鹿 支 群	1号 -	2.3					(箱式石棺)				消滅
吉岡神社古墳		前方後 円墳60	3.0						4C後半 ~ 末	昭和56年度 測量 調査	筒形網器、銅鏡、鉄劍、鉄鏡、刀子	

昭和58年3月現在、青ノ山は23基の古墳が確認され、青ノ山古墳群と呼ばれている。

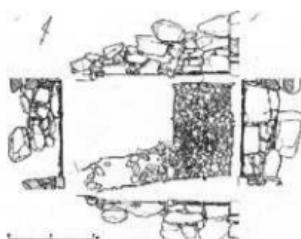
(第20図、第5表)。青ノ山古墳群のうち、大部分が横穴式石室を持つ後期～終末期の古墳である。墳丘径10～15m、石室長6m前後の円墳が主で統して小～中規模古墳群といえよう。

その中にあって青ノ山7号墳(竜塚古墳)は卓越している。青ノ山7号墳は土砂採取により消滅しているが、昭和54年度の調査概報によれば、墳丘径25m、石室長9.6m以上である。十分に巨石墳の範疇で捉えることができる。新宮古墳(坂出市)、榎賀塚、角塚、平塚(大野原町)、久本古墳^⑨、山下古墳^⑩(高松市)、中尾古墳^⑪(寒川町)など県内には巨石墳とよばれている古墳が19基、確認されている。それらは各地域の比較的低地に立地し、古墳群を伴っていない。7号墳の場合、青ノ山古墳群として捉えられる点は異色である。また近距離に青ノ山1号墓跡があり、所謂、大型横穴式石室を持つ古墳と墓跡の有機的関係として把握できる。

墓地公園付近には、7号墳以外に、墓地公園東古墳、青ノ山3～6号墳がある。墓地公園東古墳は箱式石棺で5世紀代の古墳とされている。青ノ山6号墳は、8号墳と同様のL字形石室を持つ古墳である。第6・7表は最近、発掘調査を実施した古墳を中心に県内の後期古墳の一部をまとめたものである。第38図は、それらの石室平面プラン模式図である。昭和58年3月現在、第6・7表以外の未発掘調査古墳をも含めて、県内においてL字形石室を持つ古墳は青ノ山所在の6号墳、8号墳の2基だけである。筆者が入手している情報内では、浦山5号墳^⑫のようなT字形石室の報告例は多いが、L字形石室例は全国的にもあ



第21図 青ノ山7号墳石室実測図



第22図 青ノ山6号墳石室実測図



第23図 青ノ山6号墳



第24図 青ノ山3号墳



第25図 青ノ山4号墳



第26図 青ノ山5号墳



第27図 青ノ山5号墳西方の古墳

まりない。極めて特異な石室タイプであるといえる。なお6号墳、及び8号墳は石室平面プラン以外に、開口方位、副葬品、築造時期など類似点が多く、特異集団である豪族墓と考えることができる。青ノ山3、4、5号墳は、全て横穴式石室の石材が露呈している。5号墳西方の尾根先端平坦地にも花崗岩が2石露出しており、古墳の可能性がある。

青ノ山北西地域には宝塚古墳をはじめ4基の古墳が確認されているが、詳細は不明である。

青ノ山西麓中腹には、2基の古墳が存在する。それらは山頂へ至る林道を挟んで上下にあり、ともに石室石材が露呈し横穴式石室（片袖形？）の様相を呈している。

山頂付近には、本概報で報告した青ノ山8、9号墳以外に、青ノ山1号墳、青ノ山宇多津



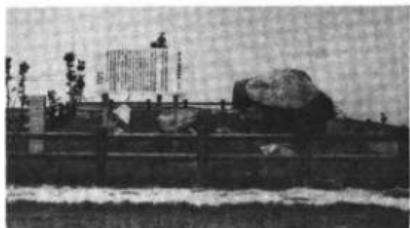
第29図 青ノ山西麓中腹の古墳（林道上）



第28図 青ノ山北西地域に所在する古墳



第30図 青ノ山西麓中腹の古墳（林道下）



第31図 青ノ山1号墳



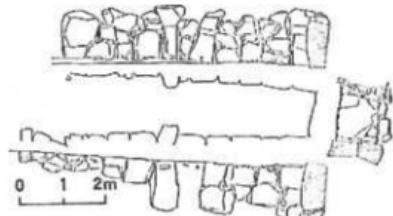
第35図 青ノ山2号墳



第32図 青ノ山宇多津4号墳



第33図 青ノ山宇多津4号墳東方の古墳



第34図 青ノ山宇多津5号墳石室実測図

5号墳など総数7基が存在する。1号墳は一辺15mの方墳で、墳丘基底部に石列が認められる。主体部は南に開口する両袖形の横穴式石室で、玄室長2.5m、幅1.5m、高さ1.5m、羨道長3.5m以上を測る。未発掘調査古墳であるが、須恵器の杯、高杯、金環、鉄釘を出土している。築造時期は6世紀末頃と推定されている。1号墳は、青ノ山古墳群中、最高所(標高220m)に立地するなど、青ノ山古墳群を代表する象徴的な古墳である。

青ノ山宇多津4号墳は、山頂駐車場から山頂へ至る遊歩道の右にあり、整備保存されている。最近、その東30mに横穴式石室を持つ古墳が1基発見された。昭和57年度に発掘調査された青ノ山宇多津5号墳は円墳(径10m)^{令12}で横穴式石室を主体部とする。石室規模は玄室長3.2m、幅1.2m、羨道長3.0m以上で、無袖形に近い両袖形プランである。これら3基と本概報で報告した9号墳は標高190~211mに存在し、古墳時代終末期の築造という共通特徴を有している。それらの古墳から南斜面を下った標高約150mに青ノ山2号墳がある。埋葬主体部は堅穴式石室状を呈するが築造時期等の詳細は不明である。

以上、青ノ山古墳群を山根から山頂へと順に羅列したが、平面的立地状況などから支群として捉える考え方がある。山頂支群(7基)



第36図 浄願寺山古墳群



第37図 母神山古墳群

宝塚支群(4基), 西麓支群(3基), 草地公園西古墳群(1基), 南麓支群(4基), 竜塚支群(1基), 草地公園東支群(1基), 東麓支群(1基)に区分できる。支群についての考え方は, 今後, 十分に検討しなければならないが一試案として掲載した。

最後に青ノ山古墳群としての特徴をまとめておく。青ノ山古墳群は, 独立峰に山頂支群をはじめ8支群で形成されている。山頂立地例としては高松市淨願寺山古墳群がある。淨願寺山には約50基の古墳が標高239.67 mの山頂部に群集している。全て横穴式石室を持つ円墳で6世紀後半~7世紀前半に築造されたものであると推定されている。両古墳群ともに, 後期群集墳でありながら, 山頂立地という立地上の特異性がある。

觀音寺市母神山には4支群61基の古墳が確認されている。支群によっては玄室が胴張りで, 二重敷石を持つ古墳が主流を占める。そのような特異な石室構造は, 地域性或いは被葬者集団固有の型と推定する。青ノ山古墳群における6号墳, 8号墳の特異なL字形石室構造についても同様のことといえるのではないかと思われる。青ノ山6, 8号墳の石室プランは特異な被葬者集団に起因するものと考えたい。

さらに淨願寺山古墳群には隣接地域に石船塚, 猫塚, 鶴尾神社4号墳などの前期古墳群である石清水尾古墳群が, 一方, 母神山古墳群には, 前方後円墳の悪魔塚が存在し, それらは両古墳群形成に大きな影響を与えたことは明確である。青ノ山古墳群における前方後円墳である吉岡神社古墳の存在も同様な位置付けができるよう。

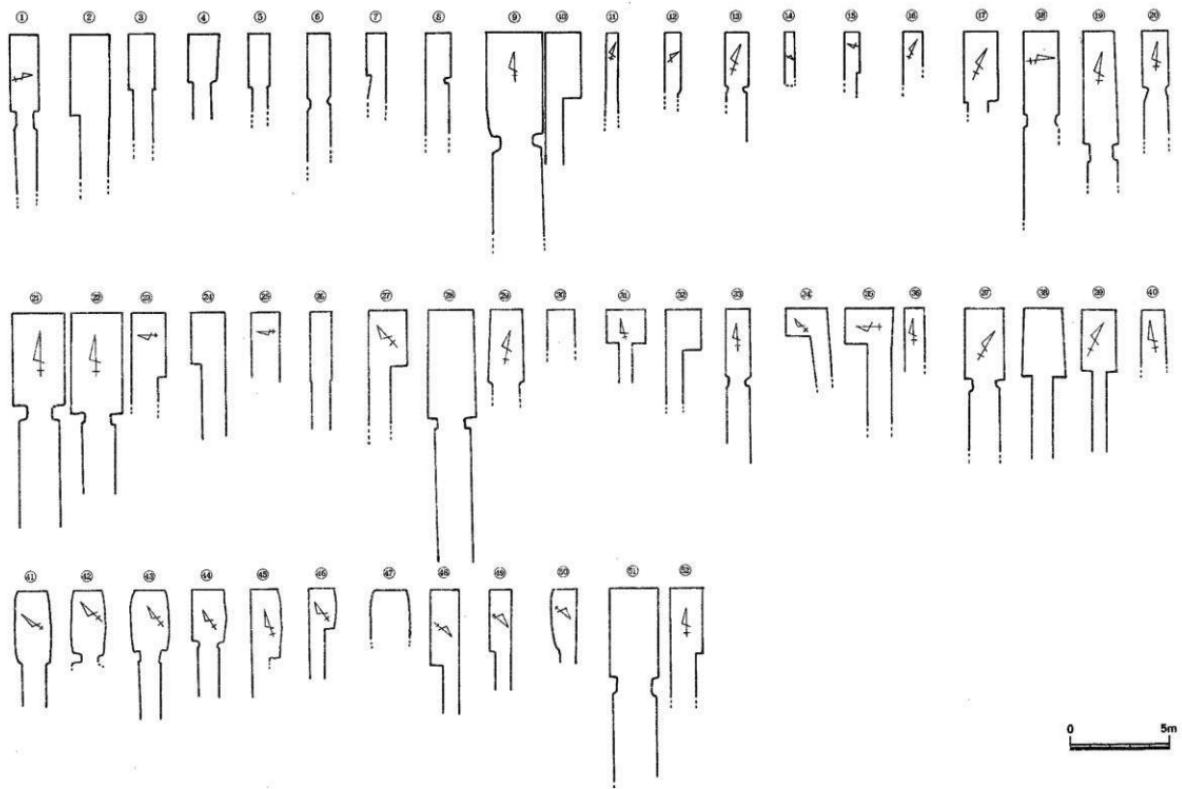
青ノ山古墳群中, 約半数がこの2~3年に発見されている。新たな発見と資料蓄積により青ノ山古墳群の全容も次第に浮きぼりにされるであろう。今後の調査, 研究に期待したい。

第6表 古墳時代後期～終末期における古墳一覧表(No.1)

古 墳 名	所 在 地	墳形(規模m)	立 地 (標 高 m)	開口方位	立 室		談 道		石室平面プラン	築造時期	副 葯 品 、 そ の 他
					長 m	幅 m	長 m	幅 m			
1 川 北 1 号 墳	引田町	円	山 上 東 南 東	3.8	1.4 ~ 1.6	4.0 ~	1.2	両	袖	6 C 末	須恵器(杯、高杯、短頸壺、提瓶、平瓶)
2 原 間 占 墳	大内町	円(12~13)	尾 根 斜 部(31)		3.8 ~ 4.0	2.06 ~ 2.14	2.5 ~	1.14	左 片	袖	6 C 後半
3 藤 井 古 墳	白鳥町	円									
4 大 末 3 号 墳	寒川町	円(12)	緩やかな尾根斜線上		2.36	1.42 ~ 1.6	2.05	0.96 ~ 1.04	両	袖	6 C 末
5 大 末 4 号 墳	〃	円(11)	〃		2.59	0.92 ~ 1.18	1.08	0.84	両	袖	6 C 末
6 奥 12 号 墳	〃	円(6~8)	尾 根 斜 線(85)		3.0	1.15	3.0	1.15	無袖に近い両袖		須恵器、鐵鑿、馬具
7 奥 15 号 墳	〃	円	尾 根 先端 近く(70)		2.2	1.3		0.8 ~ 1.0	左 片	袖	須恵器(杯、盃、提瓶)鐵劍、馬具、金環、玉類(管玉、切子玉、勾玉)
8 奥 16 号 墳	〃	円	尾 根 先 端(55)		2.15	0.9	1.6	0.6 ~ 0.8	右 片	袖	須恵器(杯、壺など)馬具、鐵鑿、刀子など
9 中 尾 古 墳	〃	円(20~)	緩やかな尾根先端(48)	南	5.2	2.8 ~ 3.0	4.8	1.9	両	袖	6 C 末
10 緑ヶ丘古墳	長尾町	円(12~13)	尾 根 先 端		3.2	1.9	3.4	0.8	右 片	袖	6 C 後半
11 鹿浦 1 号 墳	〃	円(5~6)	尾 根 東 斜 面(65)	南 南 東	2.4	0.6 ~ 0.75	1.8	0.96	無	袖	終末期
12 鹿浦 2 号 墳	〃	円	〃	南 東	3.0	0.8			右 片	袖	須恵器(杯、高杯、平瓶),土師器、金環、刀子
13 前 山 1 号 墳	〃	-	丘 陵 斜 面(116)	南 南 東	2.76	1.2	2.5	1.1	両	袖	終末期
14 西土居 2 号 墳	三木町	円(10)	緩やかな尾根(75)				(箱式石棺 長 2.6m 小口幅 0.56m, 0.63m)				須恵器(杯、短頸壺、要入鉄矛のみ、刀子、鐵鑿、金具、玉類(管玉、切子玉、白玉、ガラス玉、そらはん玉))
15 西上居 6 号 墳	〃		〃 (80)	西 南 西	2.0	0.8	1.2 ~	0.6	右 片	袖	終末期
16 石塚 2 号 墳	〃		谷に面する南斜面(104)	南 南 東	2.5	1.0	-	-	無	袖	須恵器(杯)鐵釘
17 藩 貞 谷 1 号 墳	〃		丘 陵 台 状 部(102)	南 南 東	3.4	1.8	-	-	両	袖	須恵器(杯)
18 中山田 4 号 墳	高松市		丘 陵 先 端 部	東 南 東	4.2	1.9	4.5 ~	1.9	両	袖	7 C
19 平木 1 号 墳	〃		丘 陵 南 斜 面	南					両	袖	7 C 前半
20 平木 2 号 墳	〃		〃	南	3.0	1.28 ~ 1.48	2.6 ~	1.36	両	袖	7 C 前半
21 久 本 占 墳	〃	円(20~)	水 田 中(15)	南	4.6	2.7	5.2 ~	2.2	両	袖	6 C 末
22 山 下 古 墳	〃	-	丘 碓(22.5)	南	5.05	2.55 ~ 2.85	4.0	1.5	両	袖	6 C 後半
23 八 王 子 古 墳	香川町	円	丘 陵 西 端(70)	西	3.2	1.7	1.3	1.0	右 片	袖	終末期
24 万 穀 古 墳	〃	円(12)	丘 陵 先 端		2.5	1.75	7.5	1.	左 片	袖	終末期
25 城 所 山 2 号 墳	香南町	円	尾 根 先 端(126)	西	3.3	1.5	-	-	左 片	袖	6 C 後半
26 神 慈 古 墳	板出市	円	尾 根 先 端		3.5	1.1	2.5	1.0	無袖に近い両袖	袖	7 C 初
											須恵器(杯、高杯、壺、甕、長頸壺、平瓶)金環、鐵釘

第7表 古墳時代後期～終末期における古墳一覧表(No.2)

古 墳 名	所 在 地	墳形(規模m)	立 地(標高 m)	開口方位	玄 室		横 道		石室平面プラン	築造時期	副 葯 品 、 そ の 他
					長 m	幅 m	長 m	幅 m			
27 真 伏 古 墳	板出市	円(10.5)	城 山 西 麓	南 西	2.8	2.0	3.5	1.0	右 片 柄	6C後半～	須恵器(杯、高杯、提瓶、短筒壺)十鉢器(豆、鉢)鏡面、玉類(玉玉、切子玉、管玉、空玉、ガラス玉)铁劍、刀子、馬具
28 新 宮 古 墳	〃	円(20)	尾 根 突 端(30)	〃	5.5	2.2～2.5	4.5	0.8～1.8	両	袖	〃
29 サギノクチ1号墳	〃	山 墓 西 斜 面	南	3.8	1.3～1.8	—	—	—	袖	〃	〃
30 タテハ山1号墳	〃	タテハ山の西斜面	〃	2.0	1.5	—	—	—	袖	〃	〃
31 藤 山 5 号 墳	藤原町	円(14)	丘	陵	南 南 西	1.6	2.0	2.0	0.7	両	袖
32 岡 田 井 4 号 墳	〃	円(10)	台 地 先 端(42～44)	南 東	2.0	1.8	4.0	0.6～0.9	右 片 柄	6 C 末	須恵器(杯、高杯、提瓶)玉類(管玉、丸玉)
33 青ノ山字多津5号墳	宇多津町	円(12)	山頂近く東斜面(188)	南	3.8	1.2	4.2	1.35	無袖に近い両袖	鉢木 期	須恵器(杯)銀環、鐵銃
34 青ノ山 6 分 墳	丸龜市	円(11)	丘 瘤 状 尾 根(52)	西 南 西	2.2	1.3～1.4	2.4	0.7～0.85	左片袖(L字形)	6 C 後半	須恵器(杯)銀環、鐵銃、馬具、耳環(管玉、半玉、ガラス玉)
35 青ノ山 8 分 墳	〃	円(15)	山 頂 近 く(217)	西	2.1	1.5	4.0	1.0	左片袖(L字形)	6 C 後半	須恵器(杯)銀環、鐵銃、馬具、耳環(管玉、半玉、ガラス玉)金環
36 青ノ山 9 分 墳	〃	円(12)	〃(211)	南	2.0	1.0	—	—	無 袖 ?	鉢末 期	—
37 筒 1 号 墳	善通寺市	円	丘	陵	南 南 東	3.6	2.0	3.7	1.3	両	袖
38 宮 が 尾 古 墳	〃	丘 陵 先 端	〃	〃	3.4	1.9～2.3	3.7	1.3～1.7	両	袖	6 C 後半
39 玉 墓 山 古 墳	〃	前方後円墳	独立 小 山塊(48)	南 南 東	3.0	1.8	4.5	0.75	両	袖	6 C 中葉
40 山 辺 古 墳	山本町	円(10)	丘陵尾根先端(48)	南 南 西	2.6	1.2～1.5	—	—	—	—	鉢末 期
41 黒 島 林 1 号 墳	龍谷寺市	円(20)	尾 根(62)	西 南	3.6	1.55～1.8	2.2	1.3～1.35	両	袖	6 C 末
42 黒 島 林 5 号 墳	〃	円(15～16)	尾 根 先 端(56)	南 西	3.4	1.6～1.9	2.2	—	両	袖	6 C 末
43 黒 島 林 6 号 墳	〃	円(11)	5号墳の上方25m	南 西	3.05	1.4～1.8	3.1	0.95	両	袖	6 C 末
44 黒 島 林 7 号 墳	〃	円	6号墳の上方27m(64)	南 西	2.6	1.6～1.8	2.4	—	両	袖	須恵器(杯、高杯)銀環、鐵銃、馬具、耳環(管玉、半玉、ガラス玉)金輪製冠形、玉類(玉玉、切子玉)
45 黒 島 林 8 号 墳	〃	円	7号墳の上方(69)	南 南 西	3.4	1.4～1.6	2.0	1.0	片	袖	須恵器、鐵製品、耳環、玉類(ガラス玉、土玉)
46 上 母 丹 4 号 墳	〃	円(11.6)	〃	〃	2.0	1.2～1.45	2.55	0.8	右 片 柄	—	須恵器(杯、高杯)十鉢器(豆、鉢)鏡面、刀子、耳環、玉類(管玉、ガラス玉)
47 母神山古墳群千尋支群第1号	〃	円(8)	小 尾 根(45)	〃	2.6	2.0	—	—	—	—	7 C
48 第 4 号	〃	円(16)	尾 根	北 東	3.75	1.55～1.6	2.6	0.75	左 片 柄	6 C 末	須恵器(杯、高杯)十鉢器(豆、鉢)鏡面、刀子、耳環、玉類(管玉、ガラス玉)
49 第 5 号	〃	円	尾 根	北 東	3.1	1.1～1.15	1.46	0.65	左 片 柄	6 C 後半	須恵器(杯、高杯)十鉢器(豆、鉢)鏡面、刀子、耳環、玉類(管玉、ガラス玉)
50 第 6 号	〃	円(12)	尾 根(57)	北 東	2.7	1.4	1.5	0.8	左 片 柄	6 C 前半	須恵器(杯、高杯)十鉢器(豆、鉢)鏡面、刀子、耳環、玉類(管玉、ガラス玉)
51 角 塚	大野原町	方墳(30m?)	水 田 中	南	436～452	2.5～2.6	4.6	—	両	袖	須恵器、鐵釘
52 喜 兵 衛 島 6 号 墳	直島町	円	〃	〃	3.2	1.7	2.2	—	右 片 柄	6 C 末	須恵器、釣針、製塙土器



第36図 石室平面プラン模式図一覧

第6章 ま　と　め

〈青ノ山8号墳〉

1. 本墳は標高217mの緩斜面に立地する直径12mの円墳である。
2. 横穴式石室を埋葬主体とする古墳時代後期（6世紀後半）の古墳である。
3. 特異なし字形石室は稀で、県内では青ノ山6号墳と本墳の2基だけである。
4. 玄室には棺台と推定される石材が6個遺存している。
5. 玄室と羨道の境には仕切石があり、副葬品の多くがその周辺に集中している。
6. 副葬品は須恵器、土師器、装身具類（耳環、管玉、ガラス玉）、武具類（刀子、鉄鎌）であり、馬具類、農工具類は出土していない。
7. 6号墳の被葬者とは、石室プラン、副葬品などの特徴比較から同一集團系と推定する。

〈青ノ山9号墳〉

1. 本項は標高211mの南斜面に築造された古墳である。
2. 墳丘は不明確であるが、10m程度の円墳であろうと推定している。
3. 横穴式石室を埋葬主体とするが、石室形態は不明である。
4. 石室床面は、削平面を叩きしめるだけのものである。
5. 自然崩壊か、人為的破壊か定かでないが、いずれにしても破損の進行した古墳である。
6. 出土遺物は皆無である。
7. 築造時期は石室規模などから古墳時代終末期と考える。

引用文献・参考文献

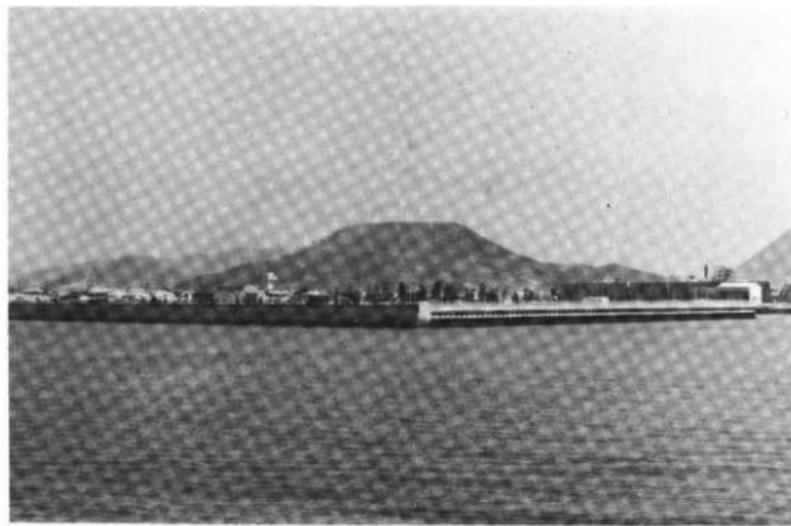
- 高橋 譲「赤生土器-山陽123-」『考古学ジャーナル』173-175.179. 1980 ニュー・サイエンス社
- 小林行雄・佐原 真『紫雲出』 昭和39年9月 真勝社
- 間壁忠彦「古地性集落の謎」『古代の日本-4.中国・四国』 昭和45年3月 角川書店
- 松本敏三ほか『青ノ山6号墳調査報告』 1977 香川県教育委員会・丸亀市教育委員会
- 松本豊胤・松本敏三ほか『母神山古墳群千尋支群第1.4.5.6号墳発掘調査概要』 1973
観音寺市教育委員会
- 伊沢章一・真鍋昌宏ほか『青ノ山7号墳』『青ノ山南麓における埋蔵文化財調査概報』 1980
丸亀市教育委員会
- 松本敏三「久本古墳」『教育香川』
- 大山寅充・藤好史郎ほか『高松市・山下古墳調査報告』 1977 香川県教育委員会
- 東原輝明『中尾古墳発掘調査報告』 1983 香川町教育委員会
- 伊沢章一・竹下和男ほか『青ノ山1号墓』『青ノ山南麓における埋蔵文化財調査概報』 1980
丸亀市教育委員会
- 松木巖庭ほか『浦山古墳群調査概報』『香川県文化財調査報告』第10号 1969 香川県教育委員会
- 森本義臣『青ノ山守多津5号墳調査報告』 1983 守多津町教育委員会
- 高松市教育委員会『右清尾山古墳群調査報告』 1973
- 石川 優ほか『母神山島林1号古墳群調査報告』 1967 観音寺市文化財保護委員会
秋山 忠・松本敏三ほか『島林第5.6号墳調査報告』 1977 島林古墳群発掘調査団
沢井静方・真鍋昌宏『上母神第4号墳発掘調査報告書』 1978 上母神古墳群発掘調査所
齊藤賢一『黒島林7号・8号墳』『香川県埋蔵文化財調査年報』 1982 香川県教育委員会
- 渡部明夫『鷦尾神社4号墳調査報告書』 1983 高松市教育委員会

古墳時代後期～終末期における古墳一覧表（第6.7表）作成における参考文献

- 丹羽佑一『大川郡引田町川北1号墳』『香川考古』創刊号 1983 香川考古刊行会
- 藤好史郎『原簡古墳』（文化財普及活動用資料）
- （著者 略歴）
- 渡部明夫ほか『大末古墳』『香川県埋蔵文化財調査年報』 1981 香川県教育委員会
- 7.8 松本敏三ほか『南庵山漢跡』 大日本ゴルフ観光株式会社ゴルフ建設用地内
埋蔵文化財第2次調査概報 1973
- 東原輝明『中尾古墳発掘調査報告書』 1983 香川町教育委員会
- 縁が丘古墳 見学のしおり（現地説明会パンフ） 1975 縁が丘古墳発掘調査会
- 11.12 伊沢章一・八重 功『長尾町陰浦1号墳、陰浦2号墳発掘調査報告』『ふるさと長尾』第3号
1979 長尾町教育委員会
- 渡部明夫ほか『前山古墳群調査報告』 1981 須原町教育委員会
14. 渡部明夫ほか『西土居古墳群』 1983 西土居古墳群発掘調査団
- 16.17 松木巖庭・松本敏三ほか『高松グランドカントリー建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』 1974
高松グランドカントリー建設工事に伴う埋蔵文化財調査団

18. 六車 功「中山田遺跡を尋ねて」『教育香川』
- 19.20. 香川大学教育学部歴史学研究室 平木 2号墳現地説明会資料 1983
21. 松本敏三「久木古墳」『教育香川』
22. 大山亮充・藤原史郎ほか『高松市・山下古墳調査報告』 1977 香川県教育委員会
23. 井上勝之・中原耕男ほか『香川県浅野八王子古墳調査報告』『文化財協会報』第58号 1973
香川県文化財保護協会
24. 中原耕男『刀塚古墳発掘調査報告』 1970 香川町教育委員会
25. 香南町教育委員会『城所山遺跡』(文化財普及活動用資料)
26. 高橋邦彦「神懸古墳の調査を終えて」『文化財協会報』第42号 1965 香川県文化財保護協会
27. 広瀬常男・六車 功「真伏古墳」『香川県埋蔵文化財調査年報』 1979 香川県教育委員会
28. 「新編 香川叢書 考古篇」 1983 香川県教育委員会
29. 井上勝之・玉城一枝『坂出市加茂町木の葉塚(サギノクチ1号墳)の線刻摩崖』『古代研究』第92号
30. 「新編 香川叢書 考古篇」 1983 香川県教育委員会
31. 松本豊胤ほか『浦山古墳群調査報告』『香川県文化財調査報告』第10号 1969 香川県教育委員会
32. 西谷れい子「綾南町岡田井古墳の調査から」『文化財協会報』 香川県文化財保護協会
33. 森本義助『青ノ山宇多津5号古墳調査報告』 1983 宇多津町教育委員会
34. 松本敏三ほか『青ノ山6号古墳調査報告』 1977 香川県教育委員会・丸亀市教育委員会
35. 本 書
37. 「新編 香川叢書 考古篇」 1983 香川県教育委員会
38. 松本豊胤『香川県宮が尾経西古墳調査概要』『古代学研究』第45号 1966
39. 森本義助・東原輝明ほか『玉惣山古墳調査概要』 1983 善通寺市教育委員会
40. 泰川知治『山辺古墳』『香川県埋蔵文化財調査年報』 1980 香川県教育委員会
41. 石川 岩ほか『母神山黒島林1号古墳群調査報告』 1967 觀音寺市文化財保護委員会
- 42.43. 秋山 忠・松木敏三ほか『黒島林5・6号古墳調査報告』 1977 黒島林古墳群発掘調査団
- 44.45. 斎藤賢一『黒島林7号・8号墳』『香川県埋蔵文化財調査年報』 1982 香川県教育委員会
46. 沢井勝方・真鍋昌宏『上母神第4号古墳発掘調査報告書』 1978 上母神古墳群発掘調査団
- 47.48.49.50. 松本豊胤・松本敏三ほか『母神山古墳群千尋支群第1.4.5.6号古墳発掘調査概要』
『觀音寺市文化財調査報告』第3号 1973 觀音寺市教育委員会
51. 藤原史郎・玉城一枝ほか『三豊郡大野原町所在の角塚古墳』『香川考古』創刊号 1983
香川考古刊行会
52. 「新編 香川叢書 考古篇」 1983 香川県教育委員会

図 版



図版1 青ノ山遠景(海より)



図版2 青ノ山遠景(南東より)



図版3 青ノ山8号墳墳丘(調査前)



図版4 青ノ山8号墳墳頂(調査前)



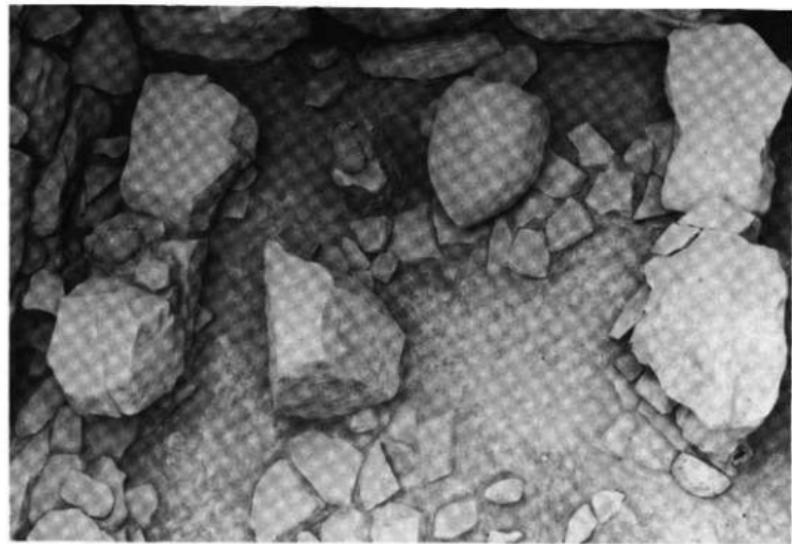
図版5 青ノ山8号墳石室上面検出状況(北より)



図版6 青ノ山8号墳石室上面検出状況(東より)



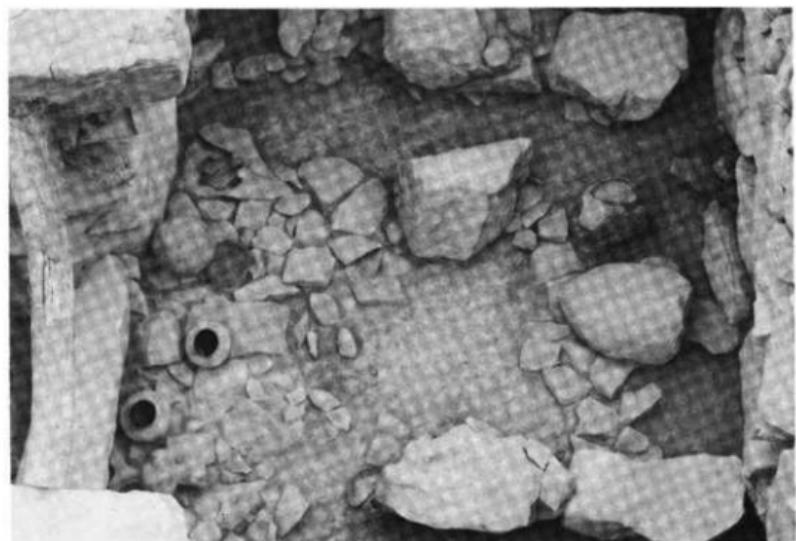
図版7 青ノ山8号墳石室全景(北より)



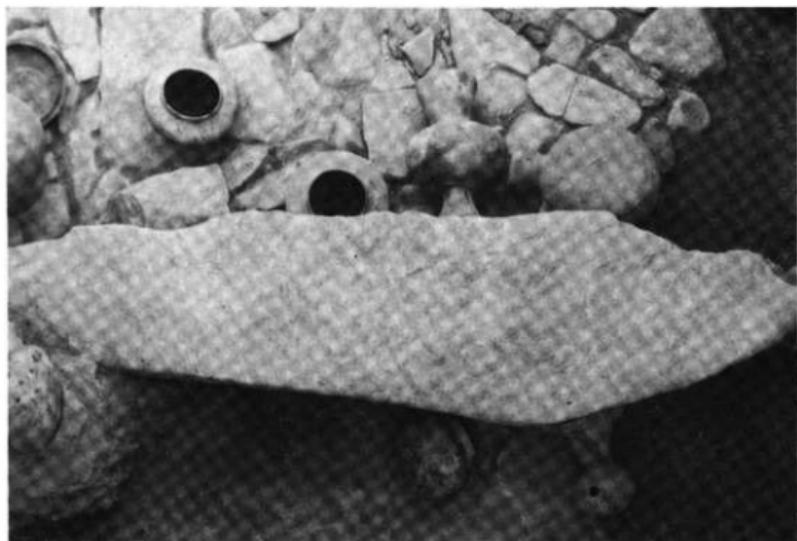
図版8 青ノ山8号墳石室(西より)



図版9 青ノ山8号墳玄室(京より)



図版10 青ノ山8号墳玄室(南より)



図版 11 青ノ山 8 号墳仕切石周辺状況



図版 12 青ノ山 8 号墳羨道(玄室より)



図版13 青ノ山8号墳羨道(羨道中央より玄室をのぞむ)



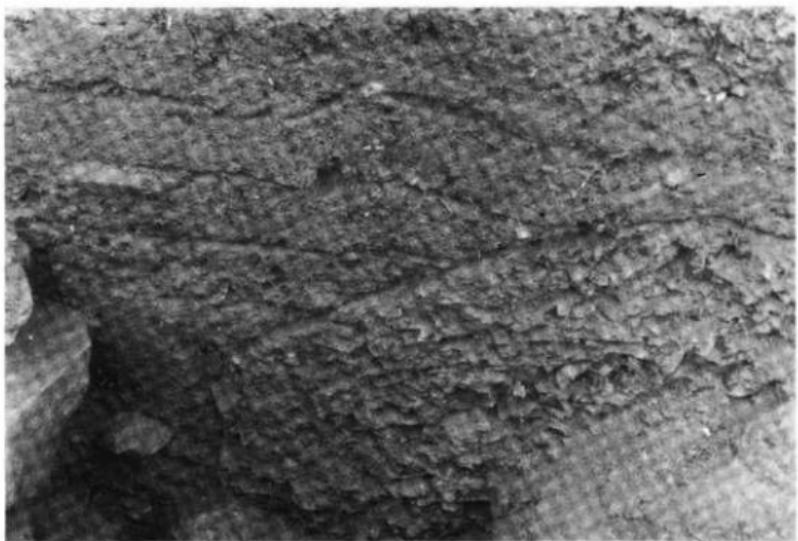
図版14 青ノ山8号墳玄室東壁



図版15 青ノ山8号墳玄室北壁



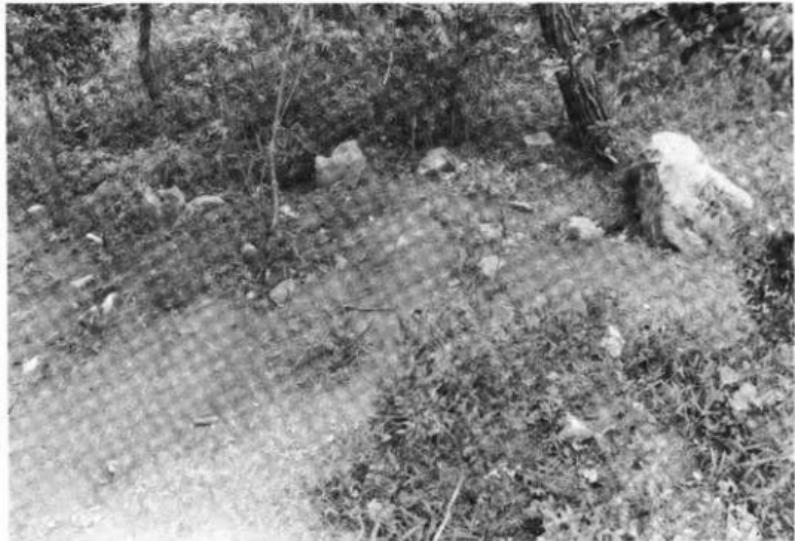
図版16 青ノ山8号墳玄室南東隅



図版17 青ノ山8号墳東トレンチ北壁



図版18 青ノ山8号墳全景(周溝の一部、検出状況)



図版 19 青ノ山9号墳伐開前(京より)



図版 20 青ノ山9号墳伐開後(北より)



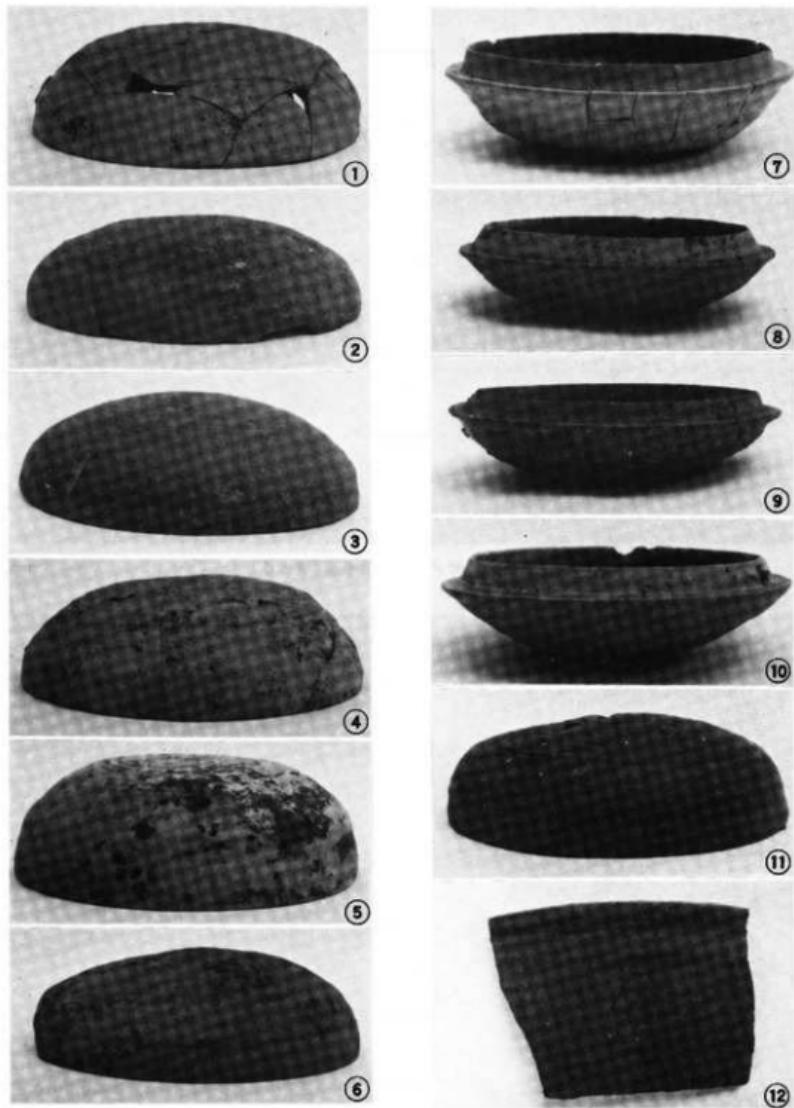
図版21 青ノ山9号墳石室(東より)



図版22 青ノ山9号墳石室(南より)



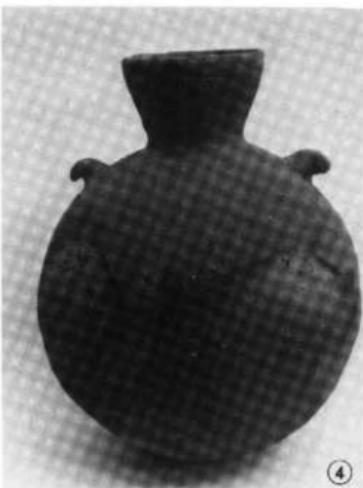
図版23 青ノ山9号墳石室(北より)



図版24 青ノ山8号墳出土遺物(杯・壺の蓋・器台?)



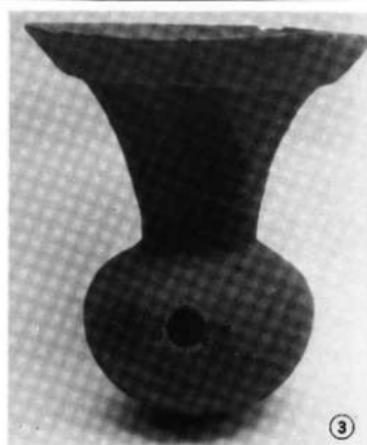
①



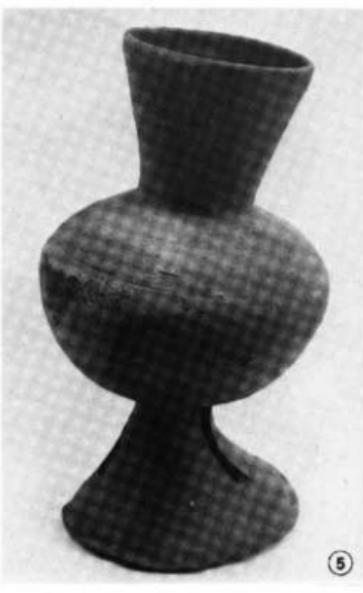
④



②



③



⑤

図版25 青ノ山8号墳出土遺物（壺・提瓶・瓶）



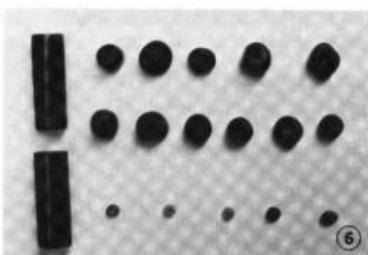
①



⑤



②



⑥



③



⑦



④



⑧

図版 26 青ノ山 8 号墳出土遺物(壺・鐵鎌・装身具・弥生土器)

青ノ山8号・9号墳発掘調査概報

——香川県丸亀市青ノ山山頂所在の
後期、終末期古墳——

1984年3月31日 発行

発行 丸亀市教育委員会
丸亀市大手町2-1
印刷 久郷印刷有限公司
丸亀市福島町84番地
